

客泛舟。遊於赤壁之下。とある。
 注六 歐陽子「秋聲賦」に、歐陽子方夜讀書。聞
 有下聲自西南來者上。とある。

參考文獻

- | | |
|----------|----------|
| 蕉門名家句集一 | 古典俳文學大系版 |
| 其角全集 | 俳諧文庫版 |
| 元祿俳人室井其角 | 今泉準一著 |
| 俳句講座二 | 明治書院刊 |
| 俳諧人名辭典 | 高木蒼梧著 |
| 蕉門と「莊子」 | 広田二郎著 |

さて右に挙げなかつた作品や散文についての調査を見なければ断定することは出来ないのであるが、以上で云ひ得ることは、愛讀書の目録が芭蕉のそれと多くの點で一致することである。即ち『論語』『孟子』等の四書、『文選』『陶淵明集』『古文眞寶』前後集、『三體詩』『聯珠詩格』『錦繡段』『詩人玉屑』『圓機活法』『蒙求』等である。これらの書は苟も學問——漢學は勿論、詩歌俳諧、戯曲小説等に志す者に及ぶまで、必讀の基本的圖書であつた。私の乏しい江戸文學の知識を以てではあるが、その背景の考察に當つて、漢文學の影響のただならぬものに驚き、且は興味を持つに至つたのである。其角もそれに異なるものでないことを十分に知り得たのである。ただ素堂や芭蕉、後の蕪村や召波に比較して其角とやや異なるところを擧げるとすれば、(一)李白・杜甫・白居易・蘇東坡・黃山谷等の詩集が、その引用から考へて、より廣く精しく讀まれてゐるやうに思はれる。(二)『周易』の理解が深く影響も大きいことである。『周易』については前に縷縷説明したところであるが、其角の『易』に對する造詣は相當なものと思はれるのである。『易』は中國の文獻の中でも最も難解なもので、『史記』や『漢書』、唐宋の詩や文章を讀むのとは勝手が違ひ、特別の學習を必要とするのである。其角は大巖和尚に學んだのであるが、かなりの域に達してゐたことは誤らないと思はれる。この點は多くの當時の國文學の士の追隨を許さざるところであつたであらう。また四書や『詩經』についても、當時の俳人たちとは比較にならぬ深いものを持つてゐたのではないかと思はれる。この點についても濟濟たる蕉門の教養人の中でも一頭地を抜いてをり、其角を以て蕉門の第一に推してゐるのも當然のことであつ

たと思ふ。その後も其角の評判は衰へることはなかつた。例へば『柳多留』に、

傘のかし人の多イは其角 (二三篇)

短冊を其角降る程もらハれる (五四篇)

一揆ほど其角取巻く句の無心 (二四一篇)

一揆かとおもや其角に句の無心 (二四一篇)

など見ても、その尊崇のほどが知られるであらう。私は素堂の如く召波の如く、漢詩の作のないわけがないと思ふのであるが、その現存しないのを残念に思ふのである。なほ散文についても、機會があればその影響關係について發表したいと思つてゐる。

注一 服部寛齋 名は保庸、字は紹郷、別に龍溪とも號した。江戸の人、木下順庵の門。家居して孝、その行ひは謹厚。享保六年歿。年五十五。著書に『談苑』六卷、『桑韓唱酬集』二卷がある。

注二 大巖和尚 名は梵千、號は幻吁。鎌倉圓覺寺の住持。

貞享二年歿。年五十七。『易』と漢詩を其角に教へ、俳諧を其角に學んだといふ。

注三 佐々木玄龍 佐玄龍とも云ふ。字は煥父、或は行といふ。號は池庵、通稱萬次郎。幕府に仕へて名を當時に顯した。享保七年歿。年七十四。

注四 英一蝶 高名の畫家。本姓は多賀氏。剃髮して潮湖といふ。俳諧を芭蕉に、畫を狩野安信に學んだ。また土佐派の筆法を究めて新たに一機軸を出した。享保九年歿。年七十三。

注五 蘇子 「前赤壁賦」に、壬戌之秋。七月既望。蘇子與

枝 仁 學 文 漢 文 學 仁 枝

づけて、世に焦尾琴と傳へ待るおもふきを、彼名琴にならば、人もあはれと清怨にたへて、かへつて稱美琴なるへくや。

この蔡邕の焦尾琴は後漢書の蔡邕傳に見える。即ち、吳人有^リ燒^レ桐^ヲ以^テ爨^グ者^ニ。邕^ハ聞^キ火^ノ烈^ク之^ノ聲^ヲ。知^リ其^ノ良^木。因^テ請^フ裁^ヲ爲^シ琴^ト。果^{シテ}有^リ美^音。而^{シテ}其^ノ尾^猶焦^リ。故^ニ時人多^ク曰^フ焦^尾琴^ト焉^ト。また『圖機活法』樹木門・梧桐の「焦尾琴」に大率同文のものが見える。其角の雅趣とその教養を知るに足るものがある。また「清怨にたへ」の語もなかなか高い響きを持つてゐる。『三體詩』錢起の「歸雁」に、二十五

絃^ニ彈^ニ夜^月。不^レ勝^ニ清^怨卻^レ飛^來。とあるによつたもので、二十五絃は琴で、その音の清くして怨むが如きを取つたのである。さて次に「詩仙」の其角について見よう。

杜子美 髭ひねりたふ藜のこま刻——『古文眞寶前集』の贈^ニ衛^八處^士に、夜^雨剪^ニ春^韭。新^炊間^黄梁^ヲ。

李太白 身が番かと不上船罷り出て——同じく杜甫の飲中八仙歌に、天子呼來不^レ上^レ船。自^ラ稱^ス臣^是酒^中仙。

山谷 其をかむ馬は雷——六月十七日晝寢に、馬^斃枯^其。詠^ニ午^枕。夢^成風^雨浪^飄江^ニ。

陳后山 紅葉とて人は繪を行く海晏寺——未詳

許渾 こよひ世間の甲子ぞかし——『三體詩』許渾の送^ニ宋^處士^歸山^に、世間^甲子^須臾^事。逢^ニ著^僊人^莫看^レ碁^ヲ。

韋應物 所化か起つて忘命兒——未詳

張籍 つれしぐれ乗あひ十九人の中——『三體詩』の張籍の哀^孟叔^に、曲^江院^裏題^名處。十九人中最少

年。

皮日休 歛から洗へ花種た泥——同じく皮日休の元達上人種^茶に、白石^淨敲^蒸朮^火。清泉^閑洗^種花^泥。

宋子問 老のはるかならず人の下にこそ——同じく宋子問の新年^作に、老人^居人^下。春^歸在^客先^一。

溫庭筠 橋の豆查は仲間の霜——同じく溫庭筠の商山早行に、雞^聲茅^店月。人^迹板^橋霜。

李涉 湯もどりの門前獨看松——同じく李涉の題^開聖^寺に、長^廊無^事僧^歸院。盡^日門^前獨^看松。

陸龜蒙 座禪の影を正うつしなり——『聯珠詩格』の陸龜蒙の贈^老僧^に、少^時寫^得坐^禪影。今^見問^人何^處僧[。]

邵康節 手のきれぬ傾城きれと棘にて——『詩人玉屑』に、平生^不作^皺眉^事。天^下無^切齒^人。

周賀 此雨に灰をうるほす芋かしら——『三體詩』の周賀の逢^潘公^に、山^衣風^壞帛[。]香^印雨^沾灰[。]

王元之 強ひて狂歌をつくる夕月——『古文眞寶前集』の王元之の觀^聖上^親試^貢士^歌に、應^制非^才但^淚垂[。]

強^作狂^歌舞^再。

孟東野 羽二重綺は密々にぬふ——同じく孟東野の遊子吟に、慈^母手^中線。遊^子身^上衣。臨^行密^縫。

韓退之 長屋かはりに棄る短檠——同じく韓退之の短檠歌に、吁^嗟世^事無^不然。墻^角君^看短^檠棄[。]

謝靈運 お影であそぶ春艸の夢——『詩人玉屑』に、靈運在^{永嘉}。因^夢惠^蓮。遂^有池^塘生^春草^之句^上。同

じく、池^塘生^春草[。]園^柳變^鳴禽[。]

眞隨ニ惠遠ニ遊上 眞ニ惠遠ニ隨ツテ遊ブニ似タリ

柏子が愁眠をさませり

○陣中の飛脚もなくや雁の聲

『圓機活法』飛禽門・雁附 雁陣・雁字の「使者書」に、蘇武使ニ匈奴ニ留メテ之詭言。武死。昭帝遣使。使者言。天子射ニ上林中得レ鷹。足有レ繫ニ帛書。言在某澤中。使者如ニ其言。單于於レ是大驚。乃放レ武還。

○種茄子北斗をねらふ光かな

『禪林句集』の五言に

寒光射ニ斗牛 寒光 斗牛ヲ射ル

西湖

はじめびいどろの御茶亭に入る時、猶句を惜むでけり。夢に扁舟に乗じて西湖にあそぶと言し東坡がことを次で

○詩をあさる成らむ雪の樽小舟

蘇東坡の杭州故人信至ニ齊安の詩を云つたものか。

昨夜風月清 昨夜 風月清ク

夢到ニ西湖上 夢ハ西湖ノ上ニ到ル

○はつ雪に此小使は何奴ぞ

『三體詩』の温庭筠の商山早行を思はせる。

雞聲茅店月 雞聲 茅店ノ月

人迹板橋霜 人迹 板橋ノ霜

漁人溺浪

○おどろけや樓船の屋根に涼む人

前書きは、黄山谷の頤軒詩に、

漁人溺於浪 漁人 浪ニ溺レ

君子溺於口 君子 口ニ溺ル

『古文眞寶後集』漢の武帝の秋風辭に、

泛ニ樓船ニ兮 濟ニ汾河 樓船ヲ泛ベテ汾河ヲ濟リ

横ニ中流ニ兮 揚ニ素波 中流ニ横ヘテ素波ヲ揚グ

○杉の上に馬ぞ見えくる村紅葉

『三體詩』の杜牧の山行に、

遠上寒山石徑斜 遠ク寒山ニ上レバ石徑斜ナリ

白雲生處有ニ人家 白雲生ズル處 人家有リ

停車坐愛楓林晚 車ヲ停メテ坐ロニ愛ス楓林ノ晚

霜葉紅於二月華 霜葉ハ二月ノ華ヨリモ紅ナリ

以上集英社版の『蕉門名家句集』一の「其角」によつて、その發句の背景となつたと思はれる漢文學を並記して見來つたのであるが、其角の漢詩文とその受容は、更に付句や散文を見る必要があるのであるが、これは次に譲つて、終りに『焦尾琴』の「詩仙」の、其角の午寂に付けた漢詩人とその詩の引用を見たいと思ふ。これは其角の愛讀書を知る上でも必要と思ふからである。なほ『焦尾琴』は元祿十四年、其角四十一才の時の撰である。これは元祿十一年十二月十日火災に遇ひ、家財と共に平生工夫に成つた作品を入れた綿囊を烏有に歸した。そこで同游の家に行きて巾筒反古の中を探り、或は彼の胸中に記憶したところを書き残したものである。その序に焦尾琴と名づけた所以を次の如く述べてゐる。

(前略) 草根よりの風情なれば、此集の名も心つかざりしに、蔡邕が竈よりやけたる桐をとり出て、あらたに一張の琴をつくりしに、焦たる所おのづから龍尾の景に成りぬるを名

都入_ニ長楊_ノ作_レ雨聲_一 都_テ長楊_ニ入_ツテ雨聲_ト作_ル
 同じく王維の送_ミ元_二使_一安西_一の

渭城朝雨_ニ浥_レ輕塵_一 渭城_ノ朝雨 輕塵_ヲ浥_ス

客舍青青_ニ柳色_ニ新 客舍 青青 柳色_ニ新_{タナリ}

傾城の讚

○青柳の額の櫛や三ヶ月

『和漢朗詠集』春の都良香の春暖の、

氣霽_ニ風梳_ニ新柳_ノ髮_一 氣霽_レテ風_ハ新柳_ノ髮_ヲ梳_リ

氷消_ニ浪洗_ニ舊苔_ノ鬢_一 氷消_エテ浪_ハ舊苔_ノ鬢_ヲ洗_フ

○幟立長者の夢や黒牡丹

『圓機活法』走獸門・牛の「黒牡丹」に、唐末、劉訓、京師富人。梁氏開國。嘗假貸以給軍。京師春遊。以牡丹爲勝賞。訓邀客賞花。乃繫水牛數百在前。指曰。此劉氏黒牡丹也。即ち黒牡丹は牛のことである。今泉準一氏は「元祿俳人寶井其角」に、

黒牡丹ねるやねりその大鳥毛 『花摘』

右の句の解説に述べられてゐる。なほ前にも掲げた句であるが、

かけ上る長者の夢や白牡丹

この兩句を比べると、上五の外は白と黒の文字が異なるだけである。思ふに白牡丹もやはり劉訓の諷刺の如く牡丹の意が寓されてゐるのである。なほ時代が下るが、文化・文政の頃の

『柳多留』に、

黒牡丹たわけ花屋に聞て見る

(六十六篇)

耳洗ふ水にはいけぬ黒牡丹

(七十六篇)

御愛樹にならぶ花あり黒牡丹

(八十三篇)

宵柏が乗つたもやはり黒牡丹

(八十四篇)

花笠の中に黒繪の黒牡丹

(八十四篇)

牡丹に牙あり黒牡丹角があり

(九十七篇)

などがある。川柳の題材となり、しかも花と間違へた者を「たわけ」と嘲つてゐるほどである。黒牡丹が花でなくて牛であることは、知識人一般の常識であつたと思はれる。そして、それはまた『圓機活法』の流布の廣さを想像することが出来るのである。

廻文

○けさたんとのみや菖の富田酒

右の句は下から逆讀んでも「けさたんとのみやあやめのとんたさけ」と同文である。このやうなものを廻文といふ。『詩人玉屑』「詩體」に、廻文。起於寶滔之妻。織錦以寄其夫也。また同書の「回文體」に、謂倒讀亦成詩也。として東坡の題金山寺の詩を擧げてゐる。『圓機活法』人倫門・夫婦の「寄錦回文」に、晋、寶滔、妻蘇氏。名蕙字若蘭。滔符堅時。爲秦州刺史。被徙流沙。蕙織錦爲文旋圖詩。以贈滔。宛轉循環以讀之。辭甚悽惋。凡八百四十字。

惠遠法師ハ法花の筆受たりしといへども、廬山の交りをゆるさざりけるとかや。

○玉あらば爰で筆とれ白蓮社

『圓機活法』僧道門・僧の「不入白蓮社」に、謝靈運求_レ入_ニ淨社_一。遠師以_ニ心雜_一止_レ之。また杜甫の題_ニ玄武禪師屋壁_一に、(『唐詩選』)

似_下得_ニ廬山路_一 廬山ノ路ヲ得_テ

十日菊

○觀世音十日の菊をかねてより
十日菊は前の「この客を」の句参照。

白扇倒懸東海天といへる句、つね此いたゞきに對して
手ににぎりたる心ちせらる。このあした雲霧立おほひ
て、山の牛腹より見たわたされたるを、要よりすそとい
はんも前句なりとて

○白雲の西へ行衛や普賢富士

石川丈山の富士山に、

雲如_ニ執素_ニ煙如_レ柄 雲ハ執素ノ如ク煙ハ柄ノ如シ

白扇倒懸東海天 白扇 倒シマニ懸ル東海ノ天

『古文眞寶前集』李白の登金陵鳳凰臺に、

三山半落青天外 三山 半ハハ落ツ青天ノ外

二水中分白鷺洲 二水 中分ス白鷺洲

○鬢の霜木賊の一夜枯にけり

高適の除夜作に、(『唐詩選』)

故郷今夜思千里 故郷 今夜 千里ヲ思フ

霜鬢明朝又一年 霜鬢 明朝 又タ一年

○山鳥のねかぬる聲に月寒し

『三體詩』賈島の題_ニ李疑幽居_一の、鳥宿池邊樹。僧

敲_ツ月下門。の翻案。

官城御普請成就して、諸家御褒美給はりける比

○陪臣は朱買臣也ゆきの袖

陪臣と買臣と語呂を合せたもの。『蒙求』の「買妻恥醜」

に、前漢朱買臣。字翁子。吳人。家貧好_レ讀_ム

書。不治_ニ産業_一。常艾_ニ薪樵_一。賣_リ以_テ給_レ食。……拜_ニ

會稽太守。上謂曰。富貴不_レ歸_ニ故郷_一。如_ニ夜_レ織_一。今子何如。買臣頓首謝。入_ニ吳界_一。云々
のり物の中に眠沈て

○年忘_レ劉伯倫はおふはれて

『蒙求』の「劉伶解醒」に、晋書。劉伶字伯倫。……
常乘_ニ鹿車_一。攜_ハ一壺酒。使_ニ人_一荷_レ鋤隨_レ之。謂_{ヒテ}
曰死_ニ則埋_レ我_一。其遺_ニ形骸_一如_レ此。

○桃花雨すは竹の葉のみだれ足

蘇東坡の、庚辰歲正月十二日。天門冬酒熟。予自漉_レ之。且

漉_レ且嘗。遂以大醉に、

菜圃漸疏花漠漠 菜圃 漸ク疏ニシテ花漠漠

竹扉斜掩雨紛紛 竹扉 斜ニ掩ヒテ雨紛紛

春王正月老

○生死のむかし男ぞと水祝ひ

前書きの春王正月は『春秋』に頻出する字面である。例へば

『春秋』隱公の元年に、元年。春王正月。とあり『左氏傳』

には、元年。春王。周正月。と云ふ。即ち『春秋』において

は春王の正月とは周王の正月の意で、王の字を用ひたのは、

周の正朔を奉じ、王者一統の義を明かにしたものである。春

正月と云ふのと同じである。

○風なりに青い雨ふる柳かな

『玉臺新詠』の簡文帝の洛陽道に

青槐隨_レ幔拂 青槐 幔ニ隨ツテ拂ヒ

綠柳逐_レ風低 綠柳 風ヲ逐ヒテ低ル

『三體詩』の杜常の華清宮に、

朝元閣上西風急 朝元閣上 西風急ナリ

『文選』陳孔璋の爲ニ袁紹檄豫州一文に、欲下以ニ蟪蛄、斧禦中、隆車之墜上。とある。蟪蛄は蟪蛄。かまきり。

『莊子』の「人間世」に、蘧伯玉曰。汝不知ニ夫、蟪蛄乎。怒ニ其臂以當ニ車轍。不レ知ニ其不レ勝レ任也。

住吉にて西鶴が矢數誹諧せし時に後見たのみければ

○驥の歩み二萬句の蠅あふぎけり

蠅は驥尾について遠きに行くといふ。『圓機活法』昆蟲門・

蠅の「託ニ驥尾」に、詩ニ

蒼蠅之飛 蒼蠅ノ飛ブ

不レ過ニ數歩 數歩ニ過ギズ

附ニ託驥尾 驥尾ニ附託シテ

聊以絶レ群 聊カ以テ群ヲ絶ス

得蟹無酒

○蟹を畫て座敷這する月み哉

『古文眞寶後集』の蘇東坡の後赤壁賦に、有レドモ客無レ酒。

有レ酒無レ肴。月白風清。如此良夜何。

維摩のさん

○山のはは大衆也けり床の月

李白の靜夜思に、(『唐詩選』に見える)

牀前看ニ月光 牀前 月光ヲ看ル

疑是地上霜 疑フラクハ是レ地上ノ霜カト

舉頭望ニ山月 頭ヲ擧ゲテ山月ヲ望ミ

低頭思ニ故郷 頭ヲ低レテ故郷ヲ思フ

張良圖

○胸中の兵出よ千々の月

張良は劉邦の謀臣。韓の人。韓のために博浪沙で鐵槌を投じ

て秦の始皇を攻めたが成らず、下邳の圯橋の上で黄石公から太公の兵法の書を授けられ、遂に秦を滅し楚を討つて劉邦をして漢の創業を成功させた人物。彼は智謀の臣で實戰の將でなかつたので斯く云つたのであらう。『蒙求』の「子房取履」に、初良數、以ニ兵法ニ説高祖。常用ニ其策。……良多病。未ニ嘗テ將ヲ兵。爲ニ畫策民。及レ封ニ功臣。良未嘗有ニ戰鬪功。帝曰。運ニ籌帷幄中。決ニ勝千里外。子房功也。

得斗酒 (陌上塵)

○淵明が隣あつめや生身玉

『古文眞寶前集』の陶淵明の雜詩に、

人生無ニ根蒂 人生 根蒂ナク

飄如ニ陌上塵 飄トシテ陌上ノ塵ノ如シ

分散逐風轉 分散シ風ヲ逐ヒテ轉ズ

此已非常身 此レ已ニ常ノ身ニ非ズ

落地爲兄弟 地ニ落チテ兄弟ト爲ル

何必骨肉親 何ゾ必ズシモ骨肉ノ親ノミナランヤ

得歡當作樂 歡ビヨ得バ當ニ樂シミヲ作スベシ

斗酒聚ニ比鄰 斗酒 比鄰ヲ聚メン

曳尾

○泥龜の鳴に這よる夕哉

『圓機活法』鱗介門・龜の「成尾塗泥」に、莊子。楚

王聘。莊子曰。吾聞楚有神龜。已三歲矣。王

中笥。而藏之。廟堂之中。此龜寧其生。留骨

而貴乎。寧其生而曳尾於塗泥乎。使者曰。

生而曳尾。莊子曰。吾曳尾矣。

○むかし見し色をも花も梅が皮

『圓機活法』百花門・梅花の「氷姿玉骨」に、桂林記。袁曹之宅後。有梅花六株。開時曾爲隣烟所燦。乃圍泥塞罩。張幕蔽風。久而曰。氷姿玉骨。世外佳人。但恨無傾城之笑耳。『詩人玉屑』詩餘の東坡に、夏夜の詩をあげて、氷肌玉骨。自清凉。無汗。とあるが、これは梅の形容ではない。

漸覺春相泥といふ切句

○削かけ膏藥ねりの鼻にあれ

前書きの詩句は『三體詩』の姚合の庭春の句

○花は都物くるゝ友はなかりけり

『蒙求』の「淵明把菊」に、南史。陶潛字淵明。……嘗九月九日無酒。出宅邊菊叢中坐。久之逢弘送酒至。の轆案。

○茶もらひに此晚鐘を山櫻

『錦繡段』徐師川の春日溪上作。時歸自大梁に、

斜日落花人散後 斜日 落花 人散シテ後

淡煙樓閣數聲鐘 淡煙 樓閣 數聲ノ鐘

○阮咸が三味線しばし時鳥

阮咸は音律に精しく、善く琵琶を弾じた。『蒙求』の「仲容青雲」に、晋書。阮咸字仲容。陳留尉氏人。任達不拘。與叔父籍爲竹林之遊。……妙解音律。善彈琵琶。雖處世。不交人事。唯共親知。絃歌酣宴而已。苟最每與咸論音律。自以爲遠不及。

龜毛に錢

○瓜の皮笠は重シとかさねけり

『詩人玉屑』の、笠重吳天雪。前の「我雪と」句参照。

市中白雨といふ題

○蘆の香も夕だつかたに醒し

白雨は夕立。『圓機活法』天文門・驟雨の「銀竹」に李白の宿鰲湖の詩を引いて

白雨映寒山 白雨 寒山ニ映シ

森森似銀竹 森森トシテ銀竹ニ似タリ

杜甫の、秦州見勅目云々の長題の詩に、

華夷相混合 華夷 相混合シ

宇宙一羶腥 宇宙 一ニ羶腥

また白居易の縛戎人に、

朝飧飢渴費杯盤 朝飧ニハ飢渴 杯盤ヲ費シ

夜臥腥臊汚牀席 夜臥ニハ腥臊 牀席ヲ汚ス

羶腥・腥臊は共に「なまぐさし」。

捕虎 東坡

○七ツ毛の蚊にくるしむや足疾鬼

前書きの東坡の捕虎は未詳。

橋上休老といふ題に

○牛泥む老の齒がみや橋すゞみ

老子の青牛に乗つた函谷關を過ぎた傳説によつたか。

『列仙全傳』に、老子者太上老君也。……昭王時。

去官歸亳隱焉。後復欲開化西域。乃以昭

王二十三年。駕青牛車。過函谷關。

畫讚

○蟪蛄の小野とはいはじ車百合

○竹の聲許由がひさごまだ青し

『圓機活法』人品門・高傑の「一瓢」に、許由居箕山。唯有一瓢。酌水掛于樹枝。風吹瓢鳴。以為煩。擲去之。同じく器用門・瓢の「風吹有聲」にも見える。この轍案。

○夏の月蚊を疵にして五百兩

『圓機活法』時令門・春夜の一刻千金に蘇東坡の春夜の詩を引いて、

春宵一刻值千金 春宵一刻 值 千金

花有清香二月有陰 花ニ清香有リ月ニ陰有リ

値はもと直に作る。直は値の意。今『圓機活法』に従つた。

「信濃にも」の句参照。

○かけ上る長者の夢や白牡丹

『圓機活法』百花門・白牡丹の「玉盃承露」に、唐詩云

長安豪貴惜春淺 長安ノ豪貴 春淺ヲ惜ム

爭賞新開紫牡丹 爭ヒテ賞ス新タニ開ク紫牡丹

別有玉盃承露冷 別ニ玉盃ノ露ヲ承ケテ冷カナル有

無下人起就月中看 人ノ起ツテ月中ニ就イテ看ルナシ

また白居易の買花に、

帝城春欲暮 帝城 春暮レント欲

喧喧車馬度 喧喧トシテ車馬度ル

共道牡丹時 共ニ道フ牡丹ノ時ト

相隨買花去 相隨ツテ花ヲ買ヒテ去ル

貴賤無常價 貴賤 賞價ナク

酬直看花數 酬直 花數ヲ看ル

同じく白居易の牡丹芳に、

花開花落二十日 花開キ花落ツル二十日

一城之人皆若狂 一城ノ人皆ナ狂スルガ若シ

○白雲にのる村もあり山ざくら

『三體詩』の杜牧の山行に、

遠上寒山石徑斜 遠ク寒山ニ上レバ石徑斜ナリ

白雲生處有人家 白雲生ズル處 人家有リ

停車坐愛楓林晚 車ヲ停メテ坐ニ愛ス楓林ノ晚

霜葉紅於二月華 霜葉ハ二月ノ華ヨリモ紅ナリ

○宵ねして遊ばん蚊帳のつり初

『古文眞寶後集』の李白の春夜宴桃李園序の、夫天地者萬物之逆旅。光陰者百代之過客。而浮生若夢。爲歡幾何。古人秉燭夜遊。良有以也。恐らくこの換骨奪胎であらう。

背面達磨

○武帝には留守と答へよ秋の風

武帝は梁の武帝。『圓機活法』釋老門・佛の「梁武溺佛」に、梁武帝。晚溺信佛道。凡三捨身止。云々 同じく「面壁九年」に、達磨至小林寺。面壁九年。不立文字。以袈裟授慧可。云々

五月十三日

○雨雲や竹と酔ふ日の人集め

『圓機活法』竹木門・移竹の叙事に、五月十三日。古人謂之竹醉日。又謂之竹迷日。栽竹多盛茂。或陰雨。則鞭行。明年笋莖交出。 氷肌玉骨とかや

富森春帆・大高子葉・神崎竹平、これらが名は焦尾琴にも聞えける也

『文選』曹子建の三良詩に、

黃鳥爲悲鳴 黃鳥 爲悲鳴ス

哀哉傷肺肝 哀シイカナ肺肝ヲ傷ク

これについては今泉準一氏の『元祿俳人其角』に詳細な解説がある。なほ蘇東坡の、與李公擇書に、道理貫心肝。忠義填骨髓。あるのも参考にする必要があらう。

春暖閑爐に坐の吟とて

○鶯の曉寒しきりくす

『圓機活法』時令門・早春の「未鶯來」に、唐太宗詩

寒隨窮律變 寒ハ窮律ニ隨ツテ變ジ

春逐鳥聲開 春ハ鳥聲ヲ逐ヒテ開ク

芝田初雁去 芝田 初メテ雁去リ

綺樹未鶯來 綺樹 未ダ鶯來ラズ

同じく飛禽門・鶯の『羞兒笛』に、韋蘇州詩

東方欲曉花眞冥 東方 曉ケント欲シテ花 眞ニ冥

鶯啼相喚亦可听 鶯啼イテ相喚ンデ亦タ听クニ可ナ

ク
リ

寒山畫贊

○拾得の几巾にからむや玉簪

几巾の意も讀みも未詳。凡は「ひじかけ」や机の象文形字。

巾は布や切れ地の意であるが、巾箱と熟する時は本箱となる。机と本箱の意か。然らば「からむ」が穩當でないやうに思はれる。からむは絡む、まきつく、まつはる意であるか

ら、箒が机や本箱に絡みはしないであらう。或は巾は帳の旁を略したものか。前に出てきたが琵琶を玳瑁と略した例もあるので、これも考へられると思ふ。几帳は廣間や部屋の間仕切りに使つた衝立の類で、これに掛けられた箒を云つたものであらうか。拾得は寒山の友人で、天台山國清寺の僧豐干に養はれた奇僧。『圓機活法』釋老門・佛の「寒山拾得」に、初豐干徑行山中。道側見一小兒。可數歲。豐干携至國清寺。付典座曰。或人來認可還之。名曰拾得。(以下前の「寐る恩に」参照)寒山拾得の畫には拾得の箒を所持したものが多し。

市間喧

○つけ木屋の手なら足なら雨蛙

陶淵明の雜詩の、結廬在人境。而無車馬喧。(前の「月花を醫す」の句参照)この無喧を喧とし、車馬を蛙に置きかへたもの。「初雪や」「市中閑」と對するものであらう。

天にあらば雛雞の羽もほしの妻 宗因

○地にあらばれん木賣呼べ女七夕

『古文眞寶』白居易の長恨歌に、

七月七日長生殿 七月七日 長生殿

夜半無人私語時 夜半 人ナク私語ノ時

在天願作比翼鳥 天ニ在リテハ願ハクハ比翼ノ鳥ト

作リ

在地願爲連理枝 地ニ在リテハ願ハクハ連理ノ枝ト

爲ラン

種竹三竿

を、流石の韓退之も知らないの意。

亦この比憎むといへる一字題を得て、彼歐陽公のことばを逐

○蠅の子の兄に舜なきにくさ哉

『古文真寶後集』に歐陽修の憎蒼蠅賦がある。蒼蠅蒼蠅。吾嗟爾之爲生。……嗚呼止棘之詩。垂之六經。於此見詩人之博物比興之爲精。宜乎。以爾刺讒人之亂。誠可嫉而可憎。

『史記』の「舜本紀」に、虞舜者名曰重華。……舜父瞽叟盲。而舜母死。瞽叟更娶妻而生象。象傲瞽叟。愛後妻子。常欲殺舜。舜避逃。及有少過。則受罪。順事父及後母與弟。日以篤謹。匪有懈。

寺前述懷

○馬老ぬ燈籠使の道しるべ

『蒙求』の「管仲隨馬」に、管仲隰朋。從於桓公。而伐孤竹。春往冬返。迷惑失道。管仲曰。老馬之智可用也。乃放老馬而隨之。遂得。もと『韓非子』の「説林」に見える。『圓機活法』走獸門・老馬の「辯道」にも見える。

魚市涼宵

○楊貴妃の夜はいきたる松魚載

白居易の長恨歌に、
春寒贈浴華清池 春寒 浴ヲ贈フ華清池
溫泉水滑洗凝脂 溫泉 水滑カニシテ凝脂ヲ洗フ

芙蓉帳暖度春宵 芙蓉ノ帳暖カニシテ春宵ヲ度ル
春宵苦短日高起 春宵 短キニ苦シミ日高クシテ起

ク

從此君王不早朝 此レ從リ君王 早朝セズ
承歡侍宴無閑暇 歡ヲ承ケ宴ニ侍シテ閑暇ナシ
春從春遊夜專夜 春ハ春遊ニ從ヒ夜ハ夜ヲ專ラニス

金屋粧成嬌侍夜 金屋 粧成ツテ嬌トシテ夜ニ侍ス

玉樓宴罷醉和春 玉樓 宴罷ンデ醉フテ春ニ和ス

魚市に松魚を見て、夜の楊貴妃を聯想したもの。

畫顔に米搗涼む哀也。放翁の句を繪にかゝせ讚のぞむ

あり。その繪は夕貝の花を書たり。句とたがひ侍るゆ

へ、自句を書侍る

○夕顔や一白のこす花の宿

放翁は陸放翁と思はれるが、その詩は不詳。放翁は名は游、字は務觀、宋の山陰の人。官は樞密院編集となり、寶草閣待制を以て致仕した。嘉定三年卒した。年八十五。才情富贍で、篇什の多いことでは古今詩人の冠である。著に『南唐書』『渭南文集』『劔南詩稿』等多い。

科頭に背けて闇中の閑をしる

○竹の尻を折ふし聞や五月闇

『三體詩』王維の、與盧員外象過崔處士興宗林亭に、
科頭箕踞長松下 科頭 箕踞 長松ノ下
白眼看他世上人 白眼 看他ス世上ノ人
萬世のさえづり黃舌をひるがへし、肺肝をつらぬく

○うぐひすにこの芥子酢は涙かな

に、詩註。燕。乙鳥也。爾雅。燕。乙也。註。齊曰燕。梁曰乙。

十日菊

○震宴のあまりもがもなきく脛

震宴は震宴であらう。『三體詩』鄭谷の十日菊の作がある。

(『聯珠詩格』にも見える。) 十日の菊とは時期を失した意であるが、ここは九月九日、重陽の宴の翌日の意。「筆をさす」句参照。

王維畫山水之賦。遠人无目。亦曰丈山尺樹寸馬豆人とあるを雨中の花

○この雨に花見ぬ人や家の豆

畫山水賦は王維でなくて荆浩であらう。その賦に、凡畫山水。意在筆先。丈山尺樹。寸馬豆人。遠人无目。遠樹無枝。遠山無皴。隱隱似眉。遠水無波。高與雲齊。此其訣也。これは畫中の遠景を書く秘訣を述べたものである。荆浩は五代後梁の人。字は浩然。山水畫家として名がある。經史にも通じた。太行の洪谷に隱れ、自ら洪谷子と號した。著に『山水訣』がある。

三月正當三十日

○春雨やひじき物には枯つゝ

前書きは『三體詩』賈島の、三月晦日。贈劉評事。の一句。

三月正當三十日

○山吹も柳の糸の孕み哉

前書きは前の句と同じ。

隣家の元結こくを

○大絃はさらすもとひに落る雁

白居易の琵琶行に、大絃嘈嘈如急雨とある。「十五から」の句参照。元結車の音を大絃の嘈嘈たるに譬へた。

○酒かいに行か雨夜の雁ひとつ

『圓機活法』節序門・寒食雨の「斷魂」に、唐人詩

清明時節雨紛紛 清明ノ時節 雨紛紛

路上行人欲斷魂 路上ノ行人 斷魂ナラント欲ス

借問酒家何處有 借問ス酒家 何レノ處ニカ有ル

牧童遙指杏花村 牧童 遙カニ指ス杏花村

右の換骨奪胎と思はれる。詩は杜牧の清明。また同じく飛禽

門・孤雁の「哀鳴」に、韓詩

嗷嗷鴻雁鳴且飛 嗷嗷タル鴻雁 鳴キ且ツ飛ブ

窮秋南去春北歸 窮秋ハ南ニ去リ春ハ北ニ歸ル

右は韓退之の鳴雁。孤雁の哀鳴を酒をかふためかと、自らを省みた作。

貴賓をまねかるゝ御約束、三年の鳴りとかや。其鳴り

世上にかくれもなし。韓退之のいまだ此鳴をきかず。

○爐開や汝をよぶは金の事

『古文眞寶後集』韓退之の送孟東野序に、大凡物

不_レ得_ニ其平_一則_レ鳴。草木之無_レ聲。風撓_レ之鳴。水

之無_レ聲。風蕩_レ之鳴。……金石之無_レ聲。或擊_レ之

之鳴。人之於_レ言也亦然。有_レ不得_レ已而後言。

其_レ言也。其_レ思也。其_レ哭也。其_レ懷也。凡出_ニ乎口而爲_レ聲

者。其_レ皆有_レ弗_レ平_一者乎。云々 この文は全篇が六百三

十三字から成るが、鳴の字が三十九回現はれる。天地の間の

あらゆる音を解説してゐるが、かくれもないこの三年の鳴り

氣。生^ハ生^{スル}萬物^ヲ之本也。萬物受^{ケテ}其^ノ氣^ヲ。以^テ資^リ始^ム。とある。これによつて其角は乾元を一年の始め、即ち元日と解し、乾元の節分とは、この年の元日が恰度立春の前日たる節分に當つたのであらう。

○十六夜や龍眼にくのから衣

『圓機活法』百果門・龍眼の叙事に、格物論。龍眼樹、如^シ荔枝^ノ。但^シ枝^ハ葉^ニ稍^{ヤニシテ}小^ハ。形^ハ如^シ彈丸^ノ。核^ハ如^シ木^ノ椀^ノ子^ノ。肉^ハ白^ク漿^ハ甘^ク如^シ密^ノ。……荔枝過^{レバ}即^チ龍眼^ニ熟^ス。號^ス荔枝奴^ト。とある。荔枝の如しとあるので荔枝について見

よう。同じく荔枝の叙事に、荔枝生^ハ三巴^ノ峽^ノ間^ニ。形狀團團^{トシテ}。如^シ帷蓋^ノ。……殼^ハ如^シ紅繪^ノ。膜^ハ如^シ紫綃^ノ。瓢肉^ハ潔白^{ニシテ}。如^シ氷雪^ノ。漿液^ハ甘^ク如^シ醴酪^ノ。とある。共に肉は白く漿は甘いとある。荔枝と龍眼については楊貴妃の好んだことで有名で、『古文眞寶前集』蘇東坡の荔枝歌に、

顛坑^レ仆^レ谷^ニ相^レ枕^ス籍^ス 坑^ニ顛^{ヘリ}谷^ニ仆^レレ^テ相^レ枕^ス籍^ス
知^ル是^レ荔枝^ノ龍^ノ眼^ノ來^ル 知^ル是^レ荔枝^ノ龍^ノ眼^ノ來^ルル^ヲ

飛^ル車^ノ跨^リ山^ノ鶴^ノ橫^レ海^ニ 飛^ル車^ノ山^ニ跨^リ鶴^ノ海^ニ橫^ルハ^ル
風^ノ枝^ノ露^ノ葉^ノ如^シ新^ノ採^ル 風^ノ枝^ノ露^ノ葉^ノ新^タニ採^ルガ^ノ如^シ

宮^中美^人一^ノ破^レ顔^ヲ 宮^中ノ美^人一^タビ顔^ヲ破^ル
とある。宮中の美人とは楊貴妃をいふ。『天寶遺事』に、楊貴妃嗜^ム荔枝^ヲ。當時^ニ以^テ馬^ヲ遞^シ馳^シ。七月^ノ七日^ノ夜^ノ至^ル京^ニ。と見える。同じく荔枝の「妃子笑」に、唐詩に、

長^安回^レ首^ヲ綉^レ成^レ堆^ヲ 長^安首^ヲ回^ラセ^バ綉^トシ^テ堆^ヲ
成^ス

山^頂千^門次^第開^ク 山^頂千^門次^第二^開ク
一^騎紅^塵妃^子笑^フ 一^騎ノ紅^塵妃^子笑^フ

山^頂千^門次^第開^ク 山^頂千^門次^第二^開ク
一^騎紅^塵妃^子笑^フ 一^騎ノ紅^塵妃^子笑^フ

無^ニ人^ノ知^ル是^レ荔枝^ノ來^ル 人^ノ知^ルナ^シ是^レ荔枝^ノ來^ルル^ヲ
右の詩文から推して龍眼肉から楊貴妃を聯想した句ではないかと思ふのである。この句は難解で異説も多いやうであるが、荔枝龍眼と熟して用ひられ、殆ど相似た、肉^ハ白^ク漿^ハ甘^ク如^シ密^ノと云ひ、瓢肉潔白^{ニシテ}如^シ氷雪^ノ。漿液^ハ甘^ク如^シ醴酪^ノとあれば更に楊貴妃の容色を聯想せしめるものがある。同じく荔枝の「十八娘」に東坡の填詞を掲げてゐるのであるが、これも参考になるであらう。

輕^ク紅^ク醜^ク白^ク雅^ク稱^ス佳^人 輕^ク紅^ク醜^ク白^ク雅^クニシテ佳^人ト稱^ス
纖^ク手^ノ擘^ク骨^ノ細^ク肥^ク香^シ 纖^ク手^ノ擘^ク骨^ノ細^ク肥^ク香^シ

恰^カ似^ク當^年十^八娘 恰^カモ似^{タリ}當^年十^八ノ娘

また明月や十六夜を見て美女を想ふのは、その美しい色にあるのであらう。また二八が十六であるからでもあらう。山口素堂の十六夜と題する七絶に、

今^宵玉^斧伐^脩月 今^宵玉^斧伐^ツ月^ヲ脩^ム

二^八蛾^眉猶^是宜 二^八ノ蛾^眉猶^ホ是^レ宜^シ

とあるのもこれである。私は龍眼肉のやうに白い膚唐衣を纏つた楊貴妃の姿を十六夜の月に見たてたもののやうに解するのである。

揚州鶴 仲夏送別

○涼までみやこのそらやつれと金

『圓機活法』飛禽門・鶴の「上揚州」。前の「鳶に乗て」参照。揚州は揚州が可。揚州の鶴とは、多くの欲すべきことを一度に集めて爲さんとすること。

○乙鳥やかろき巢を引いかのぼり

乙鳥は、つばめ・つばくろ。『圓機活法』飛禽門・燕の叙事

男兒未了菟裘債 男兒 未夕菟裘ノ債ヲ了ラズンバ
莫上向西風二說中二毛上 西風ニ向ツテ二毛ヲ説クコトナカ
レ

○唐詩選「劉延之の代下悲白頭翁上に、

此翁白頭眞可憐 此ノ翁 白頭 眞ニ憐ムベシ

伊昔紅顏美少年 伊レ昔 紅顏ノ美少年

公子王孫芳樹下 公子王孫 芳樹ノ下

清歌妙舞落花前 清歌 妙舞 落花ノ前

雪窓

○捐料の史記も師走の螢哉

『蒙求』の「孫康映雪」「車胤聚螢」。前の「二すじの」
句参照

酒滿

○葛の葉や酒天童子が二おもて

酒滿は陶淵明の有酒盈樽の意であらう。『古文眞寶後集』
の歸去來辭の、攜幼入入室。有酒盈樽。引壺觴
以自酌。眄庭柯以怡顏。

○顔見せや曉いさむ下邳の圯

『蒙求』の「子房取履」に、前漢張良。字子房。其
先韓人。嘗遊下邳圯上。有一老父。衣褐至
良所。直墮履地下。謂曰。孺子下取履。良
愕然欲歐之。爲其老。迺彊忍下取履。
因跪進。父以足受之。笑去。復還曰。孺子可
教矣。後五日平明。與我期。此。良跪曰。諾。
及往。父已先在。怒曰。與老人期。後何也。
去。後五日蚤會。五日鷄鳴往。父又先在。復

怒曰。去。後五日蚤來。五日夜半往。有頃父
亦來。喜曰。當如是。出一編書曰。讀之則爲
王者師。云々

任官の人を送るとて

○古里へ梅おり入よかたな箱

王維の左の雜詩の換骨奪胎であらう。

君自故郷來 君 故郷ヨリ來ル

應知故郷事 應ニ故郷ノ事ヲ知ルベシ

來日綺窗前 來日 綺窗ノ前

寒梅著花未 寒梅 花ヲ著ケシヤ未ダシヤ

元祿十五年八月閑あり、名月を三たびなぐさむ。人い
づれも疎ならむ。その先がけにはあらであつまる面ヲ
五ツに分て、三五の新たなる色に夜をふかしぬ

○平家なり太平記には月も見ず

『和漢朗詠集』の八月十五夜に白居易の詩を引いて、

三五夜中新月色 三五夜中 新月ノ色

二千里外故人心 二千里外 故人ノ心

また『五元集』に上交語上と前書きがある。この上交は『周
易』の「繫辭下傳」に、子曰。知幾其神乎。君子上
交。不詔。下交。不瀆。とある。また『孔子家語』の
「弟子行」には、上交下接。若截焉。と見える。

乾元の節分

○長き夜のとをくてもかき得方丸

『周易』の乾に、象曰。大哉乾元。萬物資始。乃
統天。とある。『通解』に、乾元則爲一元之氣。
以其大無對。贊之曰大哉乾元。乃一陽之

白居易の東南行一百韻に

春色辭門柳 春色 門柳ヲ辭シ

秋聲到井梧 秋聲 井梧ニ到ル

白居易の奉和思黯自題南莊見示に、

謝家別墅最新奇 謝家ノ別墅 最モ新奇

山展屏風花夾籬 山ハ屏風ヲ展ベ花 籬ヲ夾ム

臺頭有酒鶯呼客 臺頭 酒有リ鶯 客ヲ呼ブ

水面無塵風洗池 水面 塵ナク風 池ヲ洗フ

揚屋の外邊に鴨をむしりて、つゝらの通ひみちなかりけるを

○鴨の毛や鶯の衾の道ふさげ

『古文眞寶』白居易の長恨歌に、

鶯鶯瓦冷霜華重 鶯鶯ノ瓦ハ冷ヤカニシテ霜華重ク

翡翠衾寒誰與共 翡翠ノ衾ハ寒クシテ誰ト與ニカ共ニセシ

楠の銅壺の四間に一間とかや。誠に宮城ならでは及なき事なるに、萬客の朱唇をうるほせば

○初雪や湯のみ所の大銅壺

『圓機活法』麗人門・妓女の品題に、

二八佳人巧様粧 二八ノ佳人 巧様ノ粧

洞房夜夜換新郎 洞房 夜夜 新郎ヲ換フ

一雙玉手千人枕 一雙ノ玉手 千人ノ枕

半點朱唇萬客嘗 半點ノ朱唇 萬客 嘗ム

右の詩を今泉準一氏は蘇東坡の作と云はれるが、『東坡詩集』に見えない。

こまがたに舟をよせて

○此碑では江を哀まぬ螢哉

『古文眞寶前集』の杜甫の哀江頭の詩題に依つた。此碑は元祿六年に建てられた駒形の殺生禁斷の碑。

廬山雨夜

○寮坊主のまねば淋し時鳥

『和漢朗詠集』の雜に白居易の詩を引いて、

蘭省花時錦帳下 蘭省ノ花ノ時 錦帳ノ下

廬山雨夜草庵中 廬山ノ雨ノ夜 草庵ノ中

○花の夢胡蝶に似たり辰之助

『莊子』の「齊物論」。前の「睡る蝶」参照

寄竹戀

○埋られたをのが泪やまだら竹

『圓機活法』竹木門・斑竹の叙事に、舜死。二妃涙下。染竹成斑。妃死爲湘神。故曰湘妃竹。同じ

く「啼痕」に、元微之詩云

一枝斑竹渡湘沅 一枝ノ斑竹 湘沅ニ渡ル

萬里行人感別魂 萬里ノ行人 別魂ヲ感ズ

知是娥皇廟前物 知ル是レ娥皇廟前ノ物

遠隨風雨送啼痕 遠ク風雨ニ隨ツテ啼痕ヲ送ル

此友や年をかくさず白髮二毛の身をわかれて……

○我むかし坊主太夫や花あやめ

杜甫の曲江三章五句に、
遊子空嗟垂二毛 遊子 空シク嗟イテ二毛ヲ垂ル

白石素沙亦相蕩 白石 素沙 亦タ相蕩ケ
『聯珠詩格』の陳棠の終日に、

遠中郎の送李湘洲使浙に、

不言知向越 言ハザレドモ越ニ向フヲ知ル

面上有西湖 面上 西湖有り

袁中郎は名を宏道、字を無道といふ。明の萬曆の進士。わが深草元政はこの詩を好み、「袁中郎集」を校刻した。これが我が國における袁詩の行はれる機となつた。

○山のはにつばめをかへす入日哉

『古文眞寶前集』陶淵明の雜詩に、

山氣日夕佳 山氣 日夕ニ佳ナリ

飛鳥相與歸 飛鳥 相與ニ歸ル

此間有眞意 此ノ間 有眞意リ

欲辨已忘言 辨ゼント欲シテ已ニ言ヲ忘ル

目黒の西南に山庄あり。別有と號す。天地の人間にあらざるにこそ。綠雲の軒ばを深く閉て、修竹こまやかに、聽潤の流に盃をひたし、學長の窓は螢雪にかやき、四方に四の景を備ふ。巷夕に花をふみ、富士額をおほへば、昏に東海を望んで吟舌に甘露を得たり。主人宜雨公けふもくらしつと引たて玉ひけるに、醉倒して、

○二すじの道は角豆か山ざくら

①『古文眞寶前集』の李白の山中答俗人に、

桃花流水杳然去 桃花流水 杳然トシテ去ル

別有天地非人間 別ニ天地ノ人間ニ非ザル有り

②李白の鳳笙篇に、

重吟眞曲和清吹 重ネテ眞曲ヲ吟シ清吹ニ和ス

卻奏仙歌響綠雲 卻ツテ仙歌ヲ奏シテ綠雲響ク

綠雲紫氣向函關 綠雲 紫氣 函關ニ向フ

訪道應寺緱氏山 道ヲ訪ヒ寺ニ應フ緱氏山

③『三體詩』嚴維の歲初喜皇甫侍御至に、

明朝別後門還掩 明朝 別後 門還夕掩ハン

修竹千竿一老身 修竹千竿 一老身

④『圓機活法』文學門・勤學の「囊螢」に、晋車胤。字

武子。……家貧无油。夏月練囊盛數千螢火。

以照讀書。同じく「映雪」に、孫康家貧无油。

常冬月映雪讀書。『蒙求』の「孫康映雪」「車胤聚

螢」も同じ。

⑤李白の贈歷陽褚司馬。時此公爲稚子舞。故

作是詩也。に、

因爲小兒啼 因リテ小兒ノ啼クガ爲ニ

醉倒月下歸 醉倒シテ月下ニ歸ル

また白居易の洛陽東花下作に、

白頭無藉在 白頭 藉在ナシ

醉倒亦何妨 醉倒スルモ何ゾ妨ケン

○香齋散犬がねぶつて雲のみね

『列仙全傳』に、劉安漢高帝孫。封淮南王。好

儒術方技。作内書二十一篇。又著鴻寶萬年

二卷。論變化之道。有八公。往詣之。……與

安登山。大祭埋金於地。白日昇天。……所弃

置藥鼎。雞犬舐之。並得輕舉。雞鳴雲中。

犬吠天上。

門柳塵をはらふ折ふし、うぐひす啼

○御用よぶ丁兒かへすな花の鳥

李龜年は杜甫と同時代の高名の伶人。この詩を意識したので
はあるまいか。

白文

○人間の卯月にふけれ郭公

白居易の大林寺桃花に、

人間四月芳菲盡

人間四月 芳菲盡キ

山寺桃花始盛開

山寺ノ桃花 始メテ盛開ナリ

長恨春歸無覓處

長恨ス春歸ツテ覓ル處ナキヲ

不知轉入此中來

知ラズ轉タ此ノ中ニ入ツテ來ル

○水影や颯わたる藤の棚

『菜根譚』に、古徳云。竹影掃階塵不動。月輪

穿沼水無痕。

竹影掃階塵不動。月輪

不分當春作病夫

○酒ゆへと病を悟る師走かな

前書きの詩句は白居易の酬三員見贈長句の句。

内藤露沾公の高閣に溜池を觀遊して

○夏山に我は翠簾とる女かな

『和漢朗詠集』の白居易の、香鑪峯下新ト山居。草

堂初成。偶題東壁。前の「簾まけ」の句参照。詩の雪

の香鑪峯を夏山に翫案したもの。

渡江舟中

○無山の富士に揃ふや秋の色

『三體詩』の王維の寒食汜上の翫案か。

落花寂寂啼山鳥 落花寂寂トシテ啼山鳥ク

楊柳青青渡水人 楊柳青青 水ヲ渡ルノ人

納涼

○舷を玉子で敲すゞみかな

『古文眞寶後集』の蘇東坡の赤壁賦に、壬戌之秋。七月

既望。蘇子與客泛舟遊赤壁之下。……於

是飲酒樂甚。扣舷而歌之。

○足入て龍の夢見る清水哉

『圖機活法』地理門・溪の「蛟龍窟」に、青溪先有蛟

龍窟。(杜甫の絶句四首の其二)

或は同じく温泉の「龍暖水」の王建の温泉賦の城繞青山龍暖水。に依つたか。

曲終人不見

○曉のへどや隣のはとゞぎす

前書きは『宋詩別裁集』楊萬里の題望韶亭の、

曲終道是不見人 曲終ツテ道フ是レ人ヲ見ズト

江上數峯是誰子 江上ノ數峯 是レ誰ガ子ゾ

○丸腰の冶郎笠ぬげ星むかへ

『古文眞寶前集』の李白の採蓮曲に、

岸上誰家遊冶郎 岸上 誰ガ家の遊冶郎

三三五五映垂楊 三三五五 垂楊ニ映ズ

冶郎は粧をして婦人の如き男。

蓬萊讚

○鳴ぞよる三の書院のかがやく迄

『圖機活法』地理門・山の「三神山」に、封禪書。自威

宣燕昭。使入海求蓬萊方丈瀛洲。三神

山黃金銀爲宮闕。望之如雲。及到三山臨之。風輒引紅而去。終莫能至。

袁中郎 面上有西湖

○白雲や花に成ゆく顔は嵯峨

めしにはあらで、ならはんより馴たるもやさし。

○河豚汁に又本艸の咄哉

『圓機活法』百果門・橘子の「叙事」に、周官曰。橘逾ユレバ淮北ト而爲レ枳ト。此地氣所然也。同じく「江北爲レ枳」に、白六帖。晏曰。橘生ニ江北ニ爲レ枳ト。水土異也。
(「晏子」雜に、橘生ニ淮南ニ則チ爲レ橘ト。生ニ淮北ニ則チ爲レ枳ト。) 三遷云々は「蒙求」の「軻親斷機」。「文月や」の句参照。

韓退之捨酒の吟あり

○酒放す舟をうらやむ涼哉

韓退之の此日足レ可レ惜一。贈ニ張籍一に、

此日足レ可レ惜一 此ノ日 惜シムベキニ足ルモ

此酒不レ足レ嘗一 此ノ酒 嘗ムルニ足ラズ

捨酒去相語 酒ヲ捨テテ去ツテ相語リ

共分ニ一日光一 共ニ一日ノ光ヲ分タン

狙苦炎熱

○瓜むいて猿にくはする木陰哉

『古文眞寶前集』蘇東坡の足柳公權聯句に、

人皆苦ニ炎熱一 人皆ナ炎熱ニ苦シミ

我愛ニ夏日長一 我ハ夏日ノ長キヲ愛ス

薰風自レ南來 薰風 南ヨリ來リ

殿閣生ニ微涼一 殿閣 微涼ヲ生ズ

右の四句は柳公權と唐の文宗の聯句で蘇東坡はこの聯句に足して、一爲ニ居所ノ移ガ。苦樂永相忘一。云々とした。句は人を狙に措きかへたもの。

丙子のとしむ月の末つかたに、素見・紫紅をともな

ひ、淺茅がはらの出山寺にあそび侍りて、菜をつみ直をかき、落のとうなどさがし出て、鸚柳の吟をたのしむ。……………

○草莖をつむむ葉もなき雲間哉

鸚柳の吟とは、『聯珠詩格』の杜甫の絶句の、

兩箇黃鸚啼ニ翠柳一 兩箇ノ黃鸚 翠柳ニ啼キ

一行白鷺上ニ青天一 一行ノ白鷺 青天ニ上ル

應含西嶺千秋雪 應ニハ含ム西嶺 千秋ノ雪

門泊東吳萬里船 門ニハ泊ス東吳 萬里ノ船

嵐夜が孤愁をあはれむ

○芋の子もばせをの秋を力哉

杜甫の鳳凰臺に、

我能剖ニ心血一 我能ク心血ヲ剖キ

飲啄慰ニ孤愁一 飲啄 孤愁ヲ慰ム

○かげろうに寐ても動クや虎の耳

四睡とは豊干・寒山・拾得と虎が共に睡つてゐる圖。

何必迷杯走似雲。此詩大酒盛とみへたり

○此虻をたばこで逃がすけぶり哉

前書きの詩句は、白居易の、和ニ韋庶子遠坊赴ニ宴一未レダ

夜先歸ニ之作一と題する詩の一句。

○伶人の門なつかしや春の聲

『聯珠詩格』杜甫の江南逢ニ李龜年一に、

岐王宅裏尋常見 岐王ノ宅裏 尋常ニ見

崔九堂前幾度聞 崔九ノ堂前 幾度カ聞ク

正是江南好風景 正ニ是レ江南ノ好風景

落花時節又逢君 落花ノ時節 又夕君ニ逢フ

十三學得琵琶成 十三 琵琶ヲ學ビ得テ成リ
名屬教坊第一部 名ハ屬ス教坊 第一部

.....

滿座聞之皆掩泣 滿座 之ヲ聞イテ皆ナ泣ヲ掩フ
就中泣下誰最多 就中 泣下ル誰カ最モ多キ

江州司馬青衫濕 江州ノ司馬 青衫 濕フ

曹保は、曲罷、常教善才服。の注に、高齊詩話。

元和中。曹保有子善才。善才有子綱。皆執琵琶。

とあるのによる。琵琶の名手。白居易の自序に、本長

安娼女。嘗學琵琶。穆曹二善才。と見える。

○船頭のはだかに笠や雲の峯

『古文眞寶前集』の柳子厚の漁翁に、

漁翁夜傍西岸宿 漁翁 夜 西岸ニ傍ヒテ宿ス

曉汲清湘然楚竹 曉ニ清湘ヲ汲ンデ楚竹ヲ然ヤス

煙消日出不見人 煙消エ日出テテ人ヲ見ズ

款乃一聲山水綠 款乃一聲 山水綠ナリ

回看天際下中流 天際ヲ回看シテ中流ヲ下レバ

岸上無心雲相逐 岸上無心ニシテ雲 相逐フ

○畠より頭巾よふなり若菜つみ

『古文眞寶前集』の李白の採蓮曲に、

若耶溪傍採蓮女 若耶溪傍 採蓮ノ女

笑隔荷花共人語 笑ツテ荷花ヲ隔テテ人ト共ニ語ル

日照新粧水底明 日ハ新粧ヲ照シテ水底ニ明カニ

風飄香袖空中舉 風ハ香袖ヲ飄シテ中空ニ舉ル

戲賦一絕呈凡右。愛君滑稽一時豪。雁字帶霞入彩毫。

想見梅花門裏月。不知誰共定推敲。 心水道人稿

○たゞく時よき月見たりんめの門

右の心水の推敲の詩句に和して、梅花門裏月・推敲の語句に
依つたことは勿論であるが、『三體詩』賈島の題李疑幽居

が背景になつてゐる。

鳥宿池中樹 鳥ハ宿ス池中ノ樹

僧敲月下門 僧ハ敲ク月下ノ門

肅山子のもともめ、晝は探雪なり。琴と笙と太鼓と讚望

まれしに 右笙

○けしからぬ桐の一葉や笙の聲

『圓機活法』竹木門・木葉の「知秋」。前の「井の柳」の句

参照

客至 市遠無兼味と杜甫

○醬油くむ小屋の境や蓼の花

前書の客至の詩句は『杜律集解』に見える。

盤飧市遠無兼味 盤飧 市遠クシテ兼味ナク

樽酒家貧只舊醅 樽酒 家貧ニシテ只ダ舊醅

或人、大なるふくべを二ツに引わつて盃とし、外は地

さびのまゝ、内は朱にぬつて、罇口にむら衛をかゝせ

て、發句の時繪にと望侍る。

○清水影李白が面にかぶりけり

『圓機活法』人品門・醉客の「水灑面」に、李白待詔

翰林。唐明皇慶典。欲進新詞。召李白。白已醉

於酒肆。召入宮。宮人以水洒面。即令入

秉筆。頃刻成章。不加點也。

北枳南橘のたとへのごとく、父が賢なれば術を習ひ、

予が誹諧をいへば此句をつぶやく。三遷のかしこきた

但見淚痕濕 但夕見ル淚痕ノ濕ヲヲ
不知心恨誰 知ラズ心 誰レヲカ恨メル

横江舟中

○白雲に鳥の遠さよ數は

『古文眞寶後集』の武漢帝の秋風辭に、

秋風起兮白雲飛 秋風起ツテ白雲飛ビ

草木黃落雁南歸 草木 黃落シテ雁南ニ歸ル

泛樓船兮濟汾河 樓船ヲ泛ベテ汾河ヲ濟リ

橫中流兮揚素波 中流ニ橫ヘテ素波ヲ揚グ

○八雲たつ此嶮嶮を雲のみね

嶮嶮の意不詳。嶮は山の峻峻の意。嶮は密(こまやか)なる様で、熟語としては意味を爲さない。或は劍幕か。

素堂殘菊の會に

○此客を十日の菊の亭主あり

『圓機活法』百花門に、「殘菊」「十日菊」の項がある。

雨後

○かさゝきや石を重りの橋も有

『圓機活法』節序門・七夕の「鵲橋」。前の「橋となる」に見える。

止丘隅

○鶯の身をさかさまに初音かな

『大學』に、詩云。邦畿千里。惟民所止。詩云。緡蠻黃鳥。止于丘隅。子曰。於止知其所止。可

以人而不如鳥乎。

良夜に琵琶を興じて、爰も潯陽の客とおもひなす。酒

をそへ灯をとをめて、深更いやましにむら雨の心をはらし、さよめごとの耳をそばだつめる感あり。かの十三よりしてまなび得てし曹保は、秘曲もさぞな人を泣しむ、と聞えつるすさびもことほりにこそといふに、その座閑かなる聞テ人哉と聲をひそむる者はすくなうて、長う成レと枕をなげ出す。かく無風情の人、一藝ありやといへば。

○十五から酒を吞出でけふの月

『古文眞寶前集』白居易の琵琶行に、

潯陽江頭夜送客 潯陽ノ江頭 夜 客ヲ送ル

楓葉荻花秋瑟瑟 楓葉 荻花 秋 瑟瑟

醉不成歡慘將別 醉ヒテ歡ヲ成サズ慘トシテ將ニ別

別時茫茫江浸月 別ルル時 茫茫トシテ江 月ヲ浸

忽聞水上琵琶聲 忽チ聞ク水上 琵琶ノ聲

移船相近邀相見 船ヲ移シテ相近ク邀ヘテ相見ル

添酒回燈重聞宴 酒ヲ添ヘ燈ヲ回ラシテ重ネテ宴ヲ

聞ク

大絃嘈嘈如急雨 大絃ハ嘈嘈トシテ急雨ノ如ク

小絃切切如私語 小絃ハ切切トシテ私語ノ如シ

自言本是京城女 自ラ言フ本ト是レ京城ノ女

家在蝦蟇陵下住 家ハ蝦蟇陵下ニ在リテ住ス

○聲かれて猿の齒白し峯の月

『和漢朗詠集』謝觀の清賦に、

瑤臺霜滿

瑤臺 霜滿ナリ

一聲之玄鶴 唳天 一聲ノ玄鶴 天ニ唳キ

巴峽秋深 巴峽 秋深シ

五夜之哀猿 叫月 五夜ノ哀猿 月ニ叫ブ

『杜律集解』秋興八首の其二に、

聽猿實下三聲淚 猿ヲ聽イテ實ニ下ル三聲ノ淚

奉使虛隨八月槎 使ヲ奉シテ虛シク隨フ八月ノ槎

斷猿は悲しい聲で啼く猿。斷腸の猿。

三島にて旅行の重陽を

○門酒や馬屋のわきの菊を折る

『圓機活法』節序門・重九の「泛菊會」に、風土記。俗

説以ニ重九相會。登山飲ニ菊花酒。謂之登高會。

又謂之泛菊會。『古文眞寶前集』の陶淵明の雜詩

に、

採菊東籬下 菊ヲ東籬ノ下ニ採リ

悠然見南山 悠然トシテ南山ヲ見ル

秋葉禪定下山の時

○かし鳥に杖を投たるふもと哉

『圓機活法』僧道門・僧の「擲錫飛空」に、釋氏要覽。

高僧隱峯。遊五臺山淮西。擲錫飛空而往西天。

天。同じく行脚僧の「飛錫」に、釋事要覽。昔高僧

隱峯。遊五臺。出淮泗。擲錫飛空而往西天。

比丘持錫。有二十五威儀。凡至室不得着

地。必掛於壁上。故釋子稱遊僧。爲行脚僧。

錫は錫杖。

此花を肴にめてと云れて

○重箱に花なき時の野菊かな

『和漢朗詠集』の「菊」に元稹の十日菊を引いて、

不是花中偏愛菊 是レ花ノ中 偏ニ菊ヲ愛スルニア

ラス

此花開後更無花 此ノ花開イテ後 更ニ花無ケレバ

ナリ

右は『圓機活法』百花門・菊の「滿地」に王荆公の作として

見える。

莫嗔野店無肴核。薄酒堪沾豆莢肥。と周南峰が句ヲ感

ず。

○足あぶる亭主にきけば新酒哉

前書きの周南峰の詩句は「宿禾村」と題して『聯珠詩格』

に見える。

寒雲繡磐石といふ句におもひよせて

○高取の城の寒さよよしの山

前書きの寒雲の詩句の出典未詳

晝菊の讚即座

○菊白く苔は後に書れたり

『論語』の「八佾」に、繪事後素。によつたか。

怨閨誰

○傾城の小哥はかなし九月盡

『李白』の怨情に、

美人捲珠簾 美人 珠簾ヲ捲キ

深坐嘆蛾眉 深坐 蛾眉ヲ嘆ム

をまねき、對酌の句々をのづから即興となりぬ。

○信濃にも老が子はありけふの月

杜子美がもとむる所とは、草堂の、

於^レ時見^ニ疣贅^一 時^ニ於^テ疣贅トセラルルモ

骨髓幸未^レ枯 骨髓 幸ニ未^レ夕枯^レズ

飲啄愧^ニ殘生^一 飲啄 殘生ヲ愧^ズレドモ

食^レ薇不^ニ敢^餘 薇ヲ食^{シテ}敢^テ餘^{サズ}

右のやうな生に對する執着を云つたものである。『論語』

「顔淵」に、子夏曰。死生有^リ命。富貴在^リ天。『圓

機活法』時令門・春夜の「一刻千金」に、

春宵一刻值千金 春宵一刻 值^{あた}千金ナリ

花有^ニ清香^一月有^レ陰 花ニ清香有^リ月ニ陰有^リ

張九齡の和^ニ許給事直夜簡^ニ諸公^一に、(『唐詩選』)

逸興乘^ニ高閣^一 逸興 高閣ニ乘^ジ

雄飛在^ニ禁林^一 雄飛 禁林ニ在^リ

また『古文眞寶後集』の王勃の滕王閣序に、遙^{カニ}吟^レ俯^レ暢^ベ

逸興遄^{カニ}飛^フ。親知は親友の意。後帶と對をしてゐるとすれ

ば新知がよいやうにも思はれるが、親知と舊と對せしめたも

のとしては、白居易の山中問^レ月^ニに、

如^レ歸^ニ舊^ニ鄉^一國 舊鄉國ニ歸^ルガ如ク

似^レ對^ニ好^ニ親^一知 好親知ニ對^{スル}ニ似^{タリ}

『蒙求』の「仲容青雲」に、阮咸字仲容。……雖^モ處^ル

世。不^レ交^ニ人事^一。唯^テ共^ニ親^一知。絃歌酣宴而已。と

ある。

『古文眞寶前集』『聯珠詩格』の李白の山中對酌に、
兩人對酌山花開 兩人對酌スレバ山花開ク

一杯 一杯復 一杯 一杯 一杯 復タ一杯

百里に糧を裹み、十里に三喰すと云り。されば父病て
遠く遊ばれず。をのく賀に燕す

○名月は十歩に錢を握けり

『莊子』の「逍遙遊」に、適^ク莽^蒼者^ニ。三^{シテ}喰^{シテ}而^レ反^ル。復

猶^ホ果^{タリ}然^リ。適^ク百^リ里^者。宿^ク春^ノ糧^ヲ。適^ク千^里者^ニ。三^月

聚^ル糧^ヲ。前書きの三喰は三喰であらう。喰は國字で音はない。

『論語』の「里仁」に、父母在^{セバ}不^レ遠^ク遊^ブ。遊^ハ必^ズ有^リ方^{ナリ}。

○簾まけ雨に提來る杜若

白居易の、香鑪峯下新^ト山^ニ居^ル。草堂初成。偶^ニ題^ニ

東^壁。 (『和漢朗詠集』所收。「衰老は」の句参照)

○薜に鳴や六月ほととぎす

『詩經』の次の詩の換骨奪胎か。「關風」七月の、

七月 鳴 鴟 七月 鳴 鴟

八月 載 績 八月 載 績 績 績

……

四月 秀 蓂 四月 秀 蓂

五月 鳴 蜩 五月 鳴 蜩

○井の柳きのふを桐の一葉哉

『圓機活法』竹木門・木葉の「知^レ秋」に、淮南子。一葉

落^テ而^レ天^下知^ル秋^ヲ。

同じく樹木門・梧桐の「落^ニ金^ニ井^一」に、李白の詩を引いて、

梧桐落^ニ金^ニ井^一 梧桐 金井ニ落^チ

一葉在^ニ銀^ニ床^一 一葉 銀床ニ在^リ

巴峽の猿を(其便) 仲秋の月杜詩をよむ。斷猿の句
を再吟して(名月集)

物とある。何れであらうか。

○散花や香を隔つる足の裏

『古文眞寶前集』の蘇東坡の月下與客飲酒杏花下一に、『圓

機活法』天文門・歩月の「踏花影」にも

杏花飛簾散餘花 杏花 簾ニ飛ンデ餘花ヲ散ズ

明月入戸尋幽人 明月 戸ニ入ツテ幽人ヲ尋ヌ

褰衣歩月踏花影 衣ヲ褰ゲテ月ニ歩シテ花影ヲ踏ム

炯如流水涵青蘋 炯トシテ流水ノ青蘋ヲ涵スガ如シ

晝よりいねて

○うたゝねやかぶりつめたる麻頭巾

『蒙求』の「陶潛歸去」に、晋陶潛字元亮。潯陽人。

大司馬侃曾孫。少懷高尚。博學善屬文。……

嘗言。夏月虛間。高臥北窓之下。清風颯至。

自謂羲皇上人。同じく「淵明把菊」に、郡將候

灣逢其酒熱。取頭上葛巾漉酒。畢還復著

之。句は陶淵明が背後にあることは明かである。

支考遠遊の志あり。これにをくるに

○白河の關にみかへれいかのぼり

『楚辭』の屈原の「遠遊」によつたか。この篇は、悲時俗

之迫阨兮。願輕舉而遠遊。といふ句から始まる。

神仙隱逸思想によつて、神仙に遊ぶ楽しみに満ちてゐる。「い

かのぼり」も上空から故國を眺めたことに聯想したやうに思

はれる。「みかへれ」も、歷玄冥以邪徑兮。乘閒維

以反顧。の語を想はしめる。

○行く月や玳瑁を袋に納メけん
玳瑁は琵琶に用ひたのであらうが、無理な用法である。玳は

『説文』に珠とある。音はヒンである。玳は字書に見えず。

この句は白居易の「琵琶行」の踏襲と思はれる。『古文眞寶

前集』に見える。

潯陽江頭夜送客 潯陽ノ江頭 夜客ヲ送ル

楓葉荻花秋瑟瑟 楓葉 荻花 秋瑟瑟

別時茫茫江浸月 別ルル時 茫茫トシテ江月ヲ浸シ

忽聞水上琵琶聲 忽チ聞ク水上 琵琶ノ聲

唯見江心秋月白 唯ダ見ル江心 秋月白シ

沈吟收撥挿絃中 沈吟 撥ヲ收メテ絃中ニ挿ミ

整頓衣裳起斂容 衣裳ヲ整頓シ起ツテ容ヲ斂ム

○それよりして夜明の馬や蜀魂

蜀魂はほととぎす。『圓機活法』飛禽門・子規の「望帝魂」

に、寰宇記云。蜀之先擊於人皇之際。黃帝子

昌意娶蜀人女生帝喾。封其支度於蜀。始

稱王者。自名蠶叢。次伯灌。次魚鼻。后王曰

杜宇。號望帝。荆人繁靈。其尸隨水。上至汶

山下見望帝。立爲相。自以德不如繁靈。禪

位繁靈。號開明。遂自亡去。化爲子規。蜀

人听其鳴曰。我帝魂也。

七十三の老醫みづから何の薬をかたのまんやと。杜子

美がもとむる所を求めず。……かくいさぎよき明らか

なれば、死生在命富貴ねがひなし、良夜千金の期也。

ここに一樽をかまへて逸興に月見してたのしむ聲を聞

かんにはと、朽父のぞめるにまかせて、親知後帯の友

にも) 劉徳仁ノ詩

庭際 微風度 庭際 微風度り

高松 韻自生 高松 韻自ラ生ズ

○橋となる鳥はいづれ夕がらす

『圓機活法』節序門・七夕の「鵲橋」に、淮南子。鳥鵲填河成橋度織女。又。風俗通。織女七夕當度河。使鵲爲橋。

笠重吳天雪

○我雪とおもへばかるし笠の上

前書きは『詩人玉屑』に閩僧可士送僧。(『禪林句集』にも)

笠重吳天雪 笠ハ重シ吳天ノ雪

鞋香楚地花 鞋ハ香シ楚地ノ花

憶芭蕉翁

○月華や洛陽の寺社残りなく

月華似碧星如珮 月華ハ碧ニ似テ星ハ珮ノ如シ
流影 燈明玉堂内 流影 燈ハ明カナリ玉堂ノ内

『古文眞寶前集』李白の子夜吳歌に、

長安一片月 長安 一片ノ月

萬戸擣衣聲 萬戸 衣ヲ擣ツノ聲

月華は月光。「つきはな」と訓じたのは漢字を訓讀したものの。

名もたゞのりと云べし、代々の鼎の徳はさらなり。われ鍋にとち蓋ぞ。我に似合しき寶なれとて撫さすれば、箕山のひさごよりも猶かろくて、殊にかしがまし

き罪なし。いよく捨べきものにあらず。是についして

○炭とりに鏡のぬけし手樽哉

鼎の徳とは『説文』に、鼎三足兩耳。和五味之寶器也。象三析木以炊。貞省聲。昔禹收九牧之金。鑄鼎荆山之下。入山林川澤者、离魅罔蝮。莫能逢之。以協承天休。とあり、『易』の「鼎」に、鼎。元吉亨。象曰。……聖人亨以亨上帝。而大亨以養聖賢。巽耳目聰明。柔進而上行。得中而應乎剛。是以元亨。を云つたものか。『圓機活法』人品門・高傑の「二瓢」に、許由居箕山。唯有一瓢。酌水掛于樹枝。風吹瓢鳴。以爲煩。擲去之。同じく器用門・瓢の「風吹有聲」に逸士傳。許由隱箕山。無盃器。以手捧水。人遣一瓢。得之。以操飲。飲訖。挂樹上。風灑灑。有聲。由以爲喧。遂去之。

鬼女の面は般若、あだち女として古來より角あるおもて也。黑塚の能の位におもひ合侍れば、全く一念の鬼女といふにあらず、たゞ罔兩のたぐひ成るべしとて

○黑塚の誠こもれり雪女

『莊子』の「齊物論」に、罔兩問景曰。曩子行。今子止。曩子坐。今子起。何其無特操與。郭註に、罔兩。景外之微陰也。とある。『左傳』宣公三年には、鑄鼎象物。百物而爲之備。使民知神姦。故民入川澤山林。不逢不若。螭魅罔兩。莫能逢之。杜注には罔兩を水神と云ひ、『説文』には山川之精

せられたば、一月ありて七夕に哥奉りけるをいとをしみて

○文月や産るゝ文字も母の恩

『蒙求』の「軻親斷機」の、古列女傳。鄒、孟軻、母。其舍近墓。孟子少嬉遊。爲墓間之事。孟母曰。此非吾所以居處子也。乃去。舍市傍。其嬉戲。乃賈人街賣之事。又曰。此非吾所以居處子也。復徙。舍學宮之旁。其嬉戲。乃設俎豆。揖讓進退。孟母曰。眞可以居。吾子矣。遂居。

晝顔の憎き様なる旅の日數ぞいとくるし。別後を問

ば、いまだ必しも、秋香一夜におとろへずと、我翁

の、いづれか今朝に残る菊とにあらん。かばかりなら

ず、忘れがたき事のみぞ多かる

○筆をさす御笠やかろき下涼

『三體詩』の鄭谷の十日菊に、

自緣今日人心別 自ラ今日 人心ノ別ナルニ緣ル

未必秋香一夜衰 未タ必ズシモ秋香ノ一夜ニ衰ヘズ

右は『聯珠詩格』『詩人玉屑』にも見える。

草庵の留守をとひて

○衰老は簾もあげず菴の雪

『和漢朗詠集』山家に、白居易の詩を引いて、

遺愛寺鐘歇枕聽 遺愛寺ノ鐘ハ枕ヲ歇テテ聽キ

香鑪峯雪撥簾看 香鑪峯ノ雪ハ簾ヲ撥ゲテ看ル

右の韻案であらう。

手握蘭口含雞舌

○ゆづり葉や口にふくみて筆始

雞舌は香の名。雞舌香。『圓機活法』器用門・香の「雞舌」に、漢官儀。漢、尙書郎。懷、香、握、蘭。含、雞、舌、香。後侍中力存、年蒼、口臭。上出、雞、舌、香、使、含、之。

○明月や疊の上に松の影

『圓機活法』樹木門・松聲の聯句に、

風送清陰隨蝶翅 風ハ清陰ヲ送ツテ蝶翅ニ隨ヒ

月留疎影學龍蟠 月ハ疎影ヲ留メテ龍蟠ヲ學ブ

『聯珠詩格』の王安石の夜直に、（『錦繡段』にも）

春色惱人眠不得 春色 人ヲ惱マシテ眠リ得ズ

月移花影上闌干 月ハ花影ヲ移シテ闌干ニ上ル

○紙子着てくまり頭巾も三十哉

『古文眞寶前集』陶淵明の擬古に、

東方有一士 東方 一士有り

被服常不完 被服 常ニ完カラズ

三旬九遇食 三旬 九タビ食ニ遇フ

十年著一冠 十年一冠ヲ著ク

同じく陶淵明の歸田園居に、

少無適俗韻 少クシテ俗韻ニ適スルナク

性本愛丘山 性 本ト丘山ヲ愛ス

誤落塵網中 誤ツテ塵網ノ中ニ落チ

一去三十年 一去 三十年

尋花

○植木屋の亭主るす也花いまだ

『杜律集解』の嚴中丞枉駕見過に、前出「竹の香や」参照

○此松にかへす風あり庭涼み

『圓機活法』樹木門・松聲の「韻自生」に、（天文門の松風

前書きの語出典未詳

佛骨表

○しばらくは蠅を打けりかんたいし

佛骨表は正しくは論佛骨表といふ。唐の韓退之の撰。憲宗の元和十三年に奉りしもの。憲宗はこの書を見て大いに怒り、直ちに潮州の刺史に貶した。文は『圓機活法』釋老門・佛の項に見える。

三藏といひけるかたいのもの、つぶれたる袋より俳諧

の哥仙取出して、點願はしきよし申してしざりぬ。其

前の前書に、ここにいやしき土の車の林の陰に身をかなしめる有と書り。いかなるものゝなるはてにか有けん。かの卷の奥書に申つかはしける。

○あまざかる非人責し麻蓬

『荀子』の「勸學」に、蓬生^{スレバ}麻中^ニ。不^レ扶^ケ而直^シ。

茂叔讚

○傘に蝶蓮の立葉に蛙かな

『古文眞寶後集』の周茂叔の愛蓮説に、水陸草木之花。可^レ愛^者甚^蕃。……予獨^リ愛^下蓮^之出^デ淤^泥而^不染^マ。濯^ニ清^澗而^不妖^ナ。中通^外直^ク。不^レ蔓^不枝^セ。香^遠益^清。亭亭^淨植^可遠^觀。而^不可^ニ褻^翫焉。

○梁の蠅を送らん馬の上

『圓機活法』昆蟲門・蠅の「託驥尾」に、詩

蒼蠅之飛 蒼蠅ノ飛ブハ

不^レ過^ニ數^歩 數歩ニ過ギズ

附^ニ託^驥尾^一 驥尾ニ附託シテ

聊^ニ以^レ絶^レ群^一 聊カ以テ群ヲ絶ス

憫農

○燒鎌を背に暑し田艸取

『古文眞寶前集』の李紳の憫農に、

鋤^レ禾^日當^レ午 禾ヲ鋤イテ日午ニ當ル

汗^滴禾^下土 汗ハ滴ル禾下ノ土

誰^知盤^中殮 誰カ知ラン盤中ノ殮

粒^粒皆^辛苦 粒粒皆ナ辛苦ナルヲ

無腸公子

○蒲の穂や蟹を雇て折もせん

『抱朴子』の登涉に、山中辰日。稱^{スル}雨^師者^龍也。

稱^{スル}河^伯者^魚也。稱^{スル}無^腸公^子者^蟹也。また『本草綱目』蟹の釋名に、螃^蟬。郭索。横行介子。無腸公

子。時診日。以^ニ其^外骨^一。則^曰介^子。以^ニ其^内空^一。則^曰無^腸。

不^奪百^姓膏^腴とは文選のことば也

○百姓のしぼる油や一夜酒

前書きは『文選』卷八、楊子雲の「羽獵賦」の字面

もろこしにもひがごとせしためし侍れば(七月六日)

○星あひや物たばひける胸の中

前書きは次のことを云つたのであらう。『圓機活法』節序

門・七夕の「方朔窺^ニ王^母」に、七月七日。西王母

降^ル漢^武帝^ニ。東方朔於^ニ朱^雀臆^中窺^ニ王^母。時^以

桃^七枚^一獻^帝。帝欲^ニ留^核種^一之。王母笑^曰。此

桃^一千^年生^花。一^千年^結子。指^方朔^曰。此

兒^三偷^桃矣。

三遷のおしへに慣ひて、七ッになりける姪を寺へのぼ

○初雪や門に橋ある夕まぐれ

蘇東坡の、陳伯比和同字。復次韻。に、

市橋十歩即塵土 市橋ノ十歩 即チ塵土

晩雨瀟瀟殊不回 晩雨瀟瀟 殊ニ回ラズ

右の換骨奪胎か。

靈山のみちにて

○蟻螂の尋常に死又枯野哉

『聯珠詩格』の杜小山の寒夜に

尋常一樣窓前月 尋常一樣 窓前ノ月

纔有梅花便不同 纔ニ梅花有ルハ便チ同シカラズ

寒山の讚

○寐る恩に門の雪はく乞食哉

『圓機活法』の釋老門・佛の「寒山拾得」に、(拾得)滌器。

常日齋暈。澄溢食宰。寒山即來。負之而去。

寒山者始豐縣西。有寒明二谷。以其居寒岩

中。遂名寒山子。以禪皮爲冠。時來國清寺。

從拾得。取僧殘食菜滓食之。云々

布袋の讚

○大虚涼し禪師の指のゆく所

大虚は大虚であらう。李白の贈別從甥高五に、

忽見無端倪 忽チ見テ端倪ナシ

太虚可包括 太虚 包括スベシ

杜甫の對雨書懷邀許主簿に、

東嶽雲峯起 東嶽 雲峯起リ

溶溶滿太虚 溶溶トシテ太虚ニ滿ツ

妻におくれて後、子にもはなれたる人に

○稻妻や思ふもいふもまざるも

白居易の對酒に、

蝸牛角上爭何事 蝸牛角上 何事ヲ争フ

石火光中寄此身 石火光中 此ノ身ヲ寄ス

石火は石を打つて發する火であるが、これを稻妻に置きかへ

たのであらう。その滅することの早いのに譬へた。

○むら雨や驪山を山にしふかみ岬

驪山は古くから知られた景勝の地で、周の幽王がここに幸

し、秦の始皇はここに葬られ、唐の玄宗は華清宮を營んだ。

その華麗壯大な様は、『古文眞寶前集』蘇東坡の驪山の詩に

云ふ、

複道凌雲接金闕 複道 雲ヲ凌イデ金闕ニ接シ

樓觀隱煙橫翠空 樓觀 煙ニ隱レテ翠空ニ横ハル

また白居易は驪山高に云ふ

高高驪山上有宮 高高タル驪山 上ニ宮有リ

朱樓紫殿三四重 朱樓 紫殿 三四重

ある人の愛子にねだれ申されて

○郭公幟そめよとすゝめけり

子規は血を吐いて啼くと云はれる聯想によつたか。『圓機活

法』飛禽門・子規の「叙事」に、杜鵑一名杜宇。一名

子規。三四月間。夜啼達旦。其聲哀而吻有血。

漬草木。同じく「啼血」に羅鄴詩

蜀鳥千年尙愁誰 蜀鳥 千年 尙ホ誰ヲカ愁フ

聲聲啼血滿花枝 聲聲 血ニ啼イテ花枝ニ滿ツ

射者中突者勝

○蠅打よ何れにあたる點心

トス

雨意昏昏欲_二醞成_一 雨意 昏昏トシテ醞成セント欲ス
みちとせのものゝの名におふきくの筈にとよみけるにお
もひよりて

○いかで我七百の師走菊に經ん

『圓機活法』百花門・菊の「輔_レ體延_レ年」に、魏文帝與_ニ
鍾繇_ニ書_ハ九爲_ニ陽敷_ニ。俗謂_ニ宜_ニ於_ニ長久_ニ。是_レ月芳
菊紛_レ然_ニ歸_レ榮_ニ。輔_ニ體_ニ延_レ年_ニ。莫_レ斯_レ之_レ貴_ニ。謹_ニ奉_ニ
一束_ニ。以_テ助_ニ彭祖_ニ之_レ術_ニ。『列仙傳』に、彭祖諱_ハ鏗。
帝顓頊玄孫。至_ニ殷_ニ之_レ末世_ニ。年已_ニ七百餘歲_ニ而
不_レ衰_ハ。

夜座

○何となく冬夜隣をきかれけり

李白の夜坐吟に（前書きの夜座は夜坐が妥當であらう。）
冬夜夜寒覺_ニ夜長_ニ 冬夜 夜寒クシテ夜ノ長キヲ覺エ
沈吟久坐坐_ニ北堂_ニ 沈吟 久シク坐シテ北堂ニ坐ス

漫成五倫

- 君臣有義 家の子等けふを忘るなとしわすれ
 - 父子有親 鮪汁や憎きよめには猶くれじ
 - 夫婦有別 鉢たゝきめおと出ぬも哀也
 - 長幼有序 袴着は娘の子にもはかまかな
 - 朋友有信 君と我爐に手を返スしかなかれ
- 『孟子』「滕文公上」に、使_ニ契_ニ爲_ニ司徒_ニ。教_ニ以_ニ人倫_ニ。
父子有_レ親。君臣有_レ義。夫婦有_レ別。長幼有_レ序。朋
友有_レ信。

坐右銘

○行年や壁に耻たる覺書

坐有銘は座右銘が正しい。前に夜坐とあるべきところを夜座
とあつたが、其角は座と坐の文字を誤つてゐると思ふ。座右
銘は崔瑗に始る。即ち『文選』に、無_レ道_ニ人_ニ之_レ短_ニ。無_レ
說_ニ己_ニ之_レ長_ニ。施_レ人_ニ之_レ愼_ニ勿_レ念_ニ受_レ施_レ愼_ニ忽_レ忘_ニ。
と見え、白居易に「續座右銘并序」がある。曰く、崔子玉
座右銘。余竊慕_レ之_ニ。雖_レ未_レ能_レ盡_レ行_ニ。常書_ニ屋壁_ニ。
然_レ其_レ間_ニ似_レ有_ニ未_レ盡_ニ者_ニ。因_レ續_ニ爲_ニ座右銘_ニ。云々
○文月や陰を感じる蚊屋の内
文月は陰曆七月の稱。易で云へば七月は三三で、坤下乾上、
即ち半ば陰の卦である。蚊屋をつりながら秋を感じてゐる意
である。

春漸

○竹の香や柳を尋ね露のとふ

『杜律集解』の嚴中丞杆_レ駕見_レ過_ニに、
元戎小隊出_ニ郊垌_ニ 元戎 小隊ニテ郊垌ヲ出ツ
問_レ柳尋_レ花到_ニ野亭_ニ 柳ヲ問ヒ花ヲ尋ネテ野亭ニ到ル
『聯珠詩格』の李仲舟の西湖に

多是問_レ桃尋_レ柳客 多クハ是_レ桃ヲ問ヒ柳ヲ尋ヌルノ
客

近來山下少_ニ梅花_ニ 近來 山下 梅花少ナリ

三月正當三十日。風光別我苦吟身。

○大酒に起てもものうき裕哉
前書きは『三體詩』の賈島の、三月晦日贈_ニ劉評事_ニの句。

『聯珠詩格』にも見える。

市中閑

塙^ニ。結^レ庵^ヲ以居^ル。……時^ニ負^レ薪^ヲ賣^ル于市^ニ。擔^上常掛^ニ。
 一花飄^ラ。携^フ曲竹杖^ニ。每醉吟騰騰^{トシテ}以歸^ル。吟曰。
 負^レ薪朝出賣^リ。沽^ヒ酒日西歸^ル。借^ス厓家何處^ゾ。穿^レ雲入^ル翠微^ニ。

春晴

○海づらの虹をかけたる燕かな

王灣の次北固山下^ニに、(『唐詩選』に見える)

海日生^ニ殘夜^ニ 海日 殘夜ニ生^ジ

江春入^ニ舊年^ニ 江春 舊年ニ入^ル

また祖詠の江南旅情に、(同)

海色晴看^レ雨 海色 晴^レテ雨ヲ看

江聲夜聽^レ潮 江聲 夜 潮ヲ聽^ク

結廬在人境 (又は無車馬喧)

○夕日影町半に飛こてふ哉

前書きは『古文眞寶』の陶淵明の飲酒の句。

日々醉如泥

○花持て市の磔にあづからん

前書きは李白の贈^レ内の句。

初七ノ夜いねかねたりしに

○夢に來る母をかへすか郭公

無名氏の伊州歌に、

打起^ニ黃鶯兒^ニ 黃鶯兒ヲ打起^{シテ}

莫^レ教^ニ枝上啼^ニ 枝上ニ啼カシムルコトナカレ

啼時驚^ニ妾夢^ニ 啼ク時 妾ノ夢ヲ驚カシテ

不^レ得^レ到^ニ遼西^ニ 遼西ニ到ルヲ得^ズ

右は『唐詩選』に見える。これと趣を同じくしてゐる。或はこ

れを換骨奪胎したものか。

禾村

○筍よ竹より奥に犬あらん

陶淵明の桃花源記に、土地平曠^{ニシテ}。屋舍優然^{トシテ}。有^リ良田
 美池。桑竹之屬^ニ。阡陌交通^シ。雞犬相聞^ル。

對愁

○きのふ見し人や隣の玉祭

『三體詩』許渾の秋思に、(『唐詩選』にも)

高歌一曲掩^ニ明鏡^ニ 高歌一曲 明鏡ヲ掩^フ

昨日少年今白頭 昨日ノ少年 今ハ白頭

鐘聲客船

○名月や御堂の鼓かねて聞^ク

前書きは『三體詩』張繼の楓橋夜泊に、(『聯珠詩格』『唐
 詩選』にも見える)

姑蘇城外寒山寺 姑蘇城外ノ寒山寺

夜半鐘聲到^ニ客船^ニ 夜半ノ鐘聲 客船ニ到^ル

良夜雨意 (或は所思)

○いざよひも心づくしや十四日

白居易の効^ニ陶潛體^ニ其七^ニに、

中秋三五夜 中秋 三五夜

明月在前軒 明月 前軒ニ在^リ

……

良夜信難得 良夜 信ニ得難^ク

佳期杳無^レ緣 佳期 杳トシテ緣ナシ

蘇東坡の眞興寺閣禱雨に、

雲陰黯黯將^ニ嘘遍^ニ 雲陰 黯黯トシテ將ニ嘘遍ナラン

の周茂叔の「愛蓮説」に、晋陶淵明獨愛菊。とあり、淵明の菊を詠じた作が多い。

酒債尋常往處有 人生七十古來稀

○詩あきんど年を貪ル酒債哉

前書きは杜甫の曲江の句。往處有は行處在に作る。

傍に薬師堂あり。朝々暮々に此僧を訪て、廬山恥かし

からぬ笑歎。

○しばしとや早苗より見る寺の門

『文選』の宋玉の「高唐賦」に、妾在巫山之陽高丘之阻。且爲朝雲。暮爲行雨。朝朝暮暮。陽臺

之下。『圓機活法』人品門・高傑の「三笑圖」に、遠法師

送陶元亮陸修靜。不覺過虎溪。因相與大笑。今世傳三笑圖是也。虎溪は廬山にある。

○視彼蟬貧者に衣をぬく事を

『詩經』衛風の「淇奥」に、瞻彼淇奥。綠竹猗猗。

同じく小雅の「甫田」に、瞻彼洛矣。淮水泂泂。同じく「節巷」に、視彼驕人。等、視彼蟬の用法が多い。

○傾城の賢なるは此柳哉

『詩經』の大雅の「瞻卬」に、

哲夫成城 哲婦傾城

哲夫 城ヲ成シ 哲婦 城ヲ傾ク

哲婦は褒姒を指す。哲は智の多いのをいふ。婦人の智謀の多いのは城を傾けるの意。傾城は美女をいふ。『漢書』「外戚傳」に、李延年歌曰。北方有佳人。絶世而獨立。一顧傾人城。再顧傾人國。とある。

建長寺無詩俗了人

○愛に詩なし我に俗なし夏木立

『千家詩』白玉蟾の梅雪に、

有梅無雪不精神 梅有リ雪ナケレバ精神ナラズ

有雪無詩俗了人 雪有リ詩ナケレバ人を俗了ス

○元日の炭賣十の指黒し

白居易の賣炭翁に、

賣炭翁 賣炭翁

伐薪燒炭南山中 薪ヲ伐リ炭ヲ燒ク南山ノ中

满面塵灰煙火色 满面ノ塵灰 煙火ノ色

兩鬢蒼蒼十指黑 兩鬢 蒼蒼 十指黒シ

賣炭得錢何所營 炭ヲ賣リ錢ヲ得テ何ノ營ム所ゾ

○睡る蝶夜ルく何をすする事ぞ

『莊子』の「齊物論」に、昔者莊周夢爲胡蝶。栩栩然胡蝶也。自喻適志與。不知知周也。俄然覺。則遽遽然周也。不知知周之夢爲胡蝶與。胡蝶之夢爲周與上。周與胡蝶。則必有分矣。此之謂物化。(『圓機活法』人事門・夢の「胡蝶」にも見える。)

○玄寶を世にみる様か干菜賣

玄寶は僧道鏡の族人で野に隠れて生活した。句は西山に隱栖して薇を取つた伯夷叔齊を聯想したか。『圓機活法』蔬菜門・薇の「采西山」に、武王已平殷亂。伯夷叔齊。不食周粟。隱于首陽山。采薇而食之。歌曰。登彼西山兮。采其薇矣。云々(『史記』高士傳)或は許宣平の聯想によつたか。『列仙全傳』に、許宣平。新安歙縣人。唐睿宗景雲中。隱於城陽山南

前書は白居易の日長の句。また句の意は次の詩の讎案と考へられる。即ち『圓機活法』人事門・早起の「惜春」の、古詩に

惜花春起早 花ヲ惜ンテ春起クルコト早く
愛月夜眠遲 月ヲ愛シテ夜眠ルコト遲シ

○我句人しらず我ヲ啼クものは子規

『論語』の「學而」に、人_レ不_レ知_レ而_レ不_レ慍_レ。不_レ亦_レ君子_{ナラ}乎。

同じく「憲問」に、子曰。莫_レ我_レ知_レ也。夫。子貢曰。何_レ爲_レ其_レ莫_レ知_レ子_レ也。子曰。不_レ怨_レ天。不_レ尤_レ人。下_ニ學_{ニシテ}而上_ニ達_ス。知_レ我_レ者_ヲ其_レ天_乎。(「我句人しらず」は「人知ラズシテ慍ミズ」「我ヲ啼クものは子規」は「我ヲ知ル者ハ其レ天カ」の換骨奪胎であらう。「蕉門と『莊子』」に「莊子」の「天道」に據るとあるが、取らない。)

○蚊をやくや褒似が闇の私語

褒似は周の幽王の妃(褒似は褒姒が可。)容易に笑はず。烽火を見て初めて笑つた。後この爲に王も自らも共に亡ぼされた。『史記』「周本記」に、當_リ幽_王三_年。王_之後_宮。見_テ而_レ愛_レ之_ヲ(褒姒)生_ミ子_ム伯_服。竟_ニ廢_ニ申_后及_太子_一。以_ニ褒_姒爲_レ后_ト……褒_姒不_レ好_レ笑_フ。幽_王欲_ニ其_レ笑_フ。以_ニ褒_姒爲_レ后_ト……褒_姒不_レ好_レ笑_フ。幽_王欲_ニ其_レ笑_フ。萬_方。故_ニ不_レ笑_フ。幽_王爲_レ燧_烽大_鼓。有_ニ寇_至則_チ舉_ニ烽_火。諸_侯悉_ニ至_ル。而_レ無_レ寇_至。褒_姒乃_チ大_笑。幽_王說_レ之_ヲ爲_レ數_々。舉_ニ烽_火。其_レ後_ニ不_レ信_ス。諸_侯益_々亦_レ不_レ至_ス。

和古詩

○瑟ヲ燒て水雞ヲ煮ル夜酒淋し

『和漢朗詠集』の秋興に白居易の詩を引いて、
林間燠_レ酒_燒紅_葉 林間 酒ヲ燠メテ紅葉ヲ燒キ
石上題_レ詩_拂綠_苔 石上 詩ヲ題シテ綠苔ヲ拂フ
醉登_ニ二階

○酒の瀑布冷姿の九天ヨリ落ルナラン

『聯珠詩格』の李白の望_廬山_爆布_一に、
飛流直下_ニ三_千尺 飛流直下 三_千尺

疑是銀河落_ニ九_天 疑フラクハ銀河ノ九天ヨリ落ツル

カト

効白氏之隣女題

○二星私憾ムとなりの娘年十五

白居易の隣女に、

婢_娉十五勝_ニ天_仙 婢娉タル十五 天仙ニ勝レリ

白日_ノ姮_娥早_地蓮 白日ノ姮娥 早地ノ蓮

何處_閑教_鸚鵡_語 何レノ處ニカ閑ニ鸚鵡ヲシテ語ラ

シメン

碧紗窗下_繡牀_前 碧紗ノ窗下 繡牀ノ前

我身

○乞食かな天地を着たる夏衣

今泉準一氏は次の寒山詩を擧げられてゐる。

細草_作臥_褥 細草ハ臥褥ト作り

青天_爲被_蓋 青天ハ被蓋爲リ

千家の騷人 百菊の餘情

○菊うりや菊に詩人の質を賣る

千家の騷人とは宋の謝疊山の編著といふ『千家詩』の詩人たちの意か。この書は當時かなり流行を見た。『古文眞寶後集』

卻話巴山夜雨時上 卻ツテ巴山ノ夜ノ雨ヲ話スノ時ナ

ルベシ

右は李商隱の、夜雨寄北と題する詩で、『唐詩選』に見える。また『和漢朗詠集』の山家に白居易の詩を引いてゐる。

蘭省花時錦帳下 蘭省ノ花ノ時 錦帳ノ下

廬山雨夜草庵中 廬山ノ雨ノ夜 草庵ノ中

山居の僧に

○雪を汲んで猿が茶を煮けり太山寺

『錦繡段』の元唐卿の雪夜訪僧に、

一天明月晒銀沙 一天ノ明月 銀沙ヲ晒ス

童子敲氷夜煮茶 童子 氷ヲ敲イテ夜茶ヲ煮ル

また蘇東坡に、汲江煮茶と題する詩がある。

○河豚ノ記ねぶかゞ宿に我獨居て

河豚記は梅聖俞に河豚詩があるによつたか。また蘇東坡の河

豚を詠じた詩の、書惠崇畫に、

萼蒿滿地蘆芽短 萼蒿ハ地ニ滿チテ蘆芽ハ短カシ

正是河豚欲上時 正ニ是レ河豚ノ上ラント欲スル時

右は『聯珠詩格』に見える。また同じく蘇東坡の百步洪の、

獨將詩句擬鮑謝^ニを想起させる。

○鶴さもあれ顔淵生て千々の春

白居易の傷楊弘貞に、

顔子昔短命 顔子 昔 短命

仲尼惜其賢 仲尼 其ノ賢ヲ惜ム

楊生又好學 楊生 又夕學ヲ好ム

不幸復徒然 不幸ニシテ復夕徒然タリ

誰知天地意 誰カ知ラン天地ノ意

獨與龜鶴年 獨リ龜鶴ノ年ヲ與フルコトヲ

右の韻案であらう。

何故溪邊雙白鷺

无憂頭上亦垂絲

○髮あらふ鷺芹とかす沢邊哉

前書きは白居易の白鷺の句。但し溪邊は水邊に作る。

○点滴ヲ硯に奇也ほととぎす

『錦繡段』の陸務觀の聽雨戲作に、

遠檐点滴如琴筑 檐ヲ遠ル点滴 琴筑ノ如シ

支枕幽齋聽始奇 枕ヲ幽齋ニ支ヘテ聽イテ始メテ奇

ナリ

○醴に桃裏の詩人髭白し

蘇東坡の、張子野年八十五。尙聞買妾。述古令

作詩に、

錦里先生自笑狂 錦里先生 自ラ狂ヲ笑フ

莫欺九尺鬢眉蒼 欺ク莫レ九尺 鬢眉ノ蒼ナルヲ

詩人老去鶯鶯在 詩人 老イ去ツテ鶯鶯在リ

公子歸來燕燕忙 公子 歸リ來ツテ燕燕忙シ

桃裏は一本に桃李に作る。今泉準一氏は李白の、春夜宴

桃李園序(古文眞寶後集所收)を引くと考へられてゐる。

然らば桃李がよいやうに思ふ。また黃山谷の寄黃幾復

も背景として考へられる。即ち

桃李春風一杯酒 桃李 春風 一杯ノ酒

江湖夜雨十年燈 江湖ノ夜雨 十年ノ燈

惜花不拂地

○我僕落花に朝寐ゆるしけり

驚破を「そよ」と訓ず。感動詞。恐らくは白居易の「長恨歌」によつて讀ませたものであらう。漁陽、鞞鼓動^{カシテ}地來^ヲ。驚破^ス裳羽衣^ノ曲。 (古文眞寶前集)

○壁の麥律千年をわらふとかや

『莊子』の「逍遙遊」広田二郎氏著「蕉門と『莊子』」参照
○眺め送る函谷やけふ驢馬迎
李白の、流^{サレテ}夜郎^ニ贈^ニ辛判官^ニによつたか。

函谷忽驚胡馬來 函谷 忽子驚イテ胡馬來リ
奉宮桃李向明開 秦宮ノ桃李 明ニ向ツテ開ク

我愁遠謫夜郎去 我ハ愁フ遠ク謫セラレテ夜郎ニ去
ルヲ

何日金雞放赦回 何レノ日カ金雞放赦シテ回ル
○佗に絶て一爐の散茶氣味ふかし

『聯珠詩格』の壺山の夜雪に、
一爐柴火三杯酒 一爐ノ柴火 三杯ノ酒

誰記山陰有^ニ戴逵^一 誰カ記セン山陰 戴逵有ルヲ
同じく『聯珠詩格』の陳月觀の四月に

我亦鉤簾靜相對 我亦夕簾ヲ鉤イテ靜カニ相對ス
一編周易一爐香 一編ノ周易 一爐ノ香

○火燵のうたゝねや夢に眞桑を枕にす

『圓機活法』時令門・晝腹の「呂翁黃梁」に、呂翁經^ニ邯鄲^一。有^ニ盧生^一。同^ジ止^ニ于^ニ邯^ニ。主人方^ニ炊^ニ黃梁^一。翁取^リ囊^中枕^一。以^テ授^テ盧生^ニ曰^ク。枕^レ此^ニ則^チ榮^適如^レ願^一。
(枕中記。入事門・夢の「炊^ク黃梁^ニ」にも)

○詩人ゆるせ松江の河豚といはんは

『古文眞寶後集』の蘇東坡の後赤壁賦に、客曰^ク。今者薄

暮^ニ。舉^テ網^ヲ得^ル魚^ヲ。巨口細鱗。狀如^シ松江之鱸^一。顧^ミ安^ソ所^レ得^ル酒^乎。

○閑居の糠みを浮世にくぼる納豆ハなど

○夢猶さむし隣家に蛤を炊く音

これは「田舎の句合」の第二十四番であるが、閑居、隣家は共に『和漢朗詠集』の雑の目に見える。意識しての作であらう。また前者の前書きに、「題山家の糠味噌」とあるが、山家もまた同書の雑の目に見えるところである。

讀莊子

○彼レ是ハ嵐雪の偽花のうそ

『莊子』「齊物論」の彼是道樞の説によつたものか。即ち、物^ハ無^ク非^レ彼^ニ。物^ハ無^ク非^レ是^ニ。……彼^ハ出^テ於^テ是^ニ。是^ハ亦^レ因^テ彼^ニ。彼^ハ是^ニ方^ニ生^ズ之^レ說^也。雖^レ然^モ方^ニ生^ズ方^ニ死^ス。方^ニ死^ス方^ニ生^ズ。方^ニ可^ク方^ニ不^可。方^ニ不^可方^ニ可^ク。因^テ是^ニ因^テ非^ニ。因^テ非^ニ因^テ是^ニ。是^ハ以^テ聖^人不^レ由^テ。而^レ照^ス之^ヲ于^テ天^ニ。亦^レ因^テ是^ニ也。是^ハ亦^レ彼^ニ也。彼^ハ亦^レ是^ニ也。彼^ハ亦^レ一^ニ是^ニ非^ニ。此^ハ亦^レ一^ニ是^ニ非^ニ矣。且^ツ有^ニ彼^ニ是^ニ乎^哉。果^シ且^ツ無^ニ彼^ニ是^ニ乎^哉。彼^ハ是^ニ莫^ク得^ル其^ノ偶^一。謂^フ之^ヲ道^樞。彼^ハ是^ノ對^立を絶^チ、自然^ニにおいて冥合一致する境致を道樞といふ。その立場に立てば、嵐雪も花も虚偽といふのであらうか。嵐雪の句には些細精密な觀察描寫があるが、現象の皮相を捕へたものの多いことを云つたものであらう。

題江戸八景

○住べくはすまば深川ノ夜ノ雨五月

『圓機活法』天文門・客中雨の「剪^ニ西窓燭^一」に、古詩ニ何^カ當^ラ共^ニ剪^ニ西^窓燭^一。何^カツカ當^ラ共^ニ西^窓ノ燭^ヲ剪^ツテ

『詩人玉屑』卷十五に玉川子の、評茶歌にも見える。盧全は茶歌を作つて茶の効用を述べてゐるが、雪の日は彼もなら茶を喫するであらうの意。

脈を東籬の下にとつて本艸に對すと。美子が薬もいまだうつけを治せず。

○月花を醫す閑素幽栖の野巫の子有

『古文眞寶前集』の陶淵明の雜詩に、

結廬在人境 廬ヲ結ンデ人境ニ在リ

而無車馬喧 而レドモ車馬ノ喧シキナシ

問君何能爾 君ニ問フ何ゾ能ク爾ルト

心遠地自偏 心遠ケレバ地自ラ偏ナリ

採菊東籬下 菊ヲ東籬ノ下ニ採リ

悠然見南山 悠然トシテ南山ヲ見ル

『文選』にも見える。美子は子美か。子美は杜甫の字。

『杜律集解』の賁至に

不嫌野外無供給 野外 供給スルナキヲ嫌ハズンバ

乘輿還來看藥欄 興ニ乗ジテ還タ來ツテ藥欄ヲ看ヨ

また同じく杜甫の、將歸成都草堂途中作。先寄嚴鄭公に

常苦崩沙捐藥欄 常ニ苦シム崩レテ沙ノ藥欄ヲ捐ス

ルコトヲ

也從江檻落風湍 也夕江檻ノ風湍ヲ落スニ從ス

藥欄とは藥園の欄。杜甫は藥草を栽培してゐた。

○今案ズルニ寒食の家には自身番

『圓機活法』節序門の「寒食」に、荆楚歲時記。冬至

後一百五日。有疾風甚雨。謂之寒食。周禮。

炬氏仲春。禁火于國中。注。季春將出火也。丹陽集。心爲大火。懼火盛。故禁之。是以寒食有龍忌之禁。と見える。

○鶯に乗て春を送るに白雲や

『古文眞寶前集』の崔顥の登黃鶴樓に、

昔人已乘黃鶴去 昔人已ニ黃鶴ニ乗ジテ去ル

此地空餘黃鶴樓 此ノ地空シク餘ス黃鶴樓

黃鶴一去不復返 黃鶴 一タビ去ツテ復タ返ラズ

白雲千載空悠悠 白雲 千載 空シク悠悠

或は『圓機活法』飛禽門・鶴の「上揚州」に、小説。有客。相從各言所志。或願爲揚州刺史。或願

多貴才。或願騎鶴上揚州。其一人曰。腰纏十萬貫。騎鶴上揚州。

（廣田二郎氏の「蕉門と「莊子」には「莊子」の影響を指摘せられてゐる。）

○何と夏羽織縮緬重し紗ハ輕し

『圓機活法』百官門・總官の「雪山輕重」に、杜詩。諸葛

蜀人愛。文翁儒官成。公來雪山重。公去雪山

輕。の蹊案であらう。或は同じく仕官門・報恩の「泰山鴻

毛」に、結構子詩。感恩重許君命。泰山一

擲輕鴻毛。

○石の枕に蝕屋ありける今の茶屋

『圓機活法』人事門・夢の「炊黃梁」に、沈中記。開

元中。呂翁經邯鄲。有盧生。同止于邸。主人

方炊黃梁。翁取囊中枕。以授盧生曰。枕此

榮適如願。

○鉦カン／＼驚破郭公草の戸に

に、夏之日。冬之夜。百歳之後。歸_ル于_レ其_ノ居_ニ。と見える。但しこの「葛生」の章は、序に、刺_ニ晋_ノ獻_公也。好_ニ攻_戰。則_チ國_人多_シ喪_矣。とある。晋の獻公は攻戰を好んだため、死する者、虜となつて歸らざる者多く、その妻の憂へて作つた詩であるといふ。この詩の意は、夏の長き日、冬の長き夜は、夫を思ふ情がいよいよ切で、戰場の夫の存亡は知られず、生きて逢ふことは期待できず、ただ死して後に同穴を遂げたいと思ふ意であるが、其角は斷章取義したものものやうである。

杜中不賣薪と文選
ぜになくや山時鳥町外レ

前書きに『文選』とあるが、『淮南子』の「齊俗訓」の語である。其角の記憶違ひではあるまいか

甲申來復日、篁影堂新樞探題 羽帚
鼻を掃孔雀の玉や煤籠

「復」の字は『康熙字典』等に見當らず。惟ふに「復」ではあるまいか。甲申來復日となれば意味が通じる。「周易」「復」の卦に、復_亨。出入_レ无_レ疾。朋來_{无_レ咎}。反_ニ復_ニ其_ノ道_ヲ。七日_{ニシテ}來_レ復_、利_レ有_レ攸_レ往_、とある。復は戻る意。一陽が下に復生するを一陽來復と云ふ。一陽來復は十一月冬至の卦であるから、この年の甲申_{きのえさる}の日が冬至に當つたものと思はれる。

さて以下集英社版の古典俳文學大系8『蕉門名家句集』一の其角の句について、順序も大率これに従つて、その漢詩文の攝取により成つたと思はれる句と漢詩文を併記することにする。見落しも誤りも多いことと思はれるので大方の叱正を仰ぐものである。なほ前書きの多くあるものについては、適當なものを

取つた。

○なら茶の詩さこそ廬全も雪の日ハ

『古文眞寶前集』に盧全の「茶歌」がある。

日高丈五睡正濃

日高キコト丈五 睡リ正ニ濃ナリ

軍將扣門驚周公

軍將 門ヲ扣イテ周公ヲ驚カス

柴門反關無俗客

柴門 反ツテ關シテ俗客ナシ

紗帽籠頭自煎喫

紗帽 頭ヲ籠メテ自ラ煎喫ス

碧雲引風吹不斷

碧雲 風ヲ引イテ吹イテ斷ヘズ

白華浮光凝碗面

白華 光ヲ浮ベテ碗面ニ凝ル

一碗喉吻潤

一碗 喉吻潤ヒ

二碗破孤悶

二碗 孤悶ヲ破リ

三碗搜枯腸

三碗 枯腸ヲ搜ル

惟有文字五千卷

惟ダ文字五千卷有リ

四碗發輕汗

四碗 輕汗ヲ發ス

平生不平事

平生 不平ノ事

盡向毛孔散

盡ク毛孔ニ向ツテ散ズ

五碗肌骨清

五碗 肌骨清ク

六碗通仙靈

六碗 仙靈通シ

七碗喫不得也

七碗 喫スルコト得ザルナリ

唯覺兩腋習習清風生

唯夕覺ユ兩腋 習習トシテ清風ノ生ズルヲ

蓬萊山在何處

蓬萊山ハ何レノ處ニカ在ル

玉川子乘此清風欲歸去

玉川子 此ノ清風ニ乗シテ歸去セント欲ス

吹けば物は皆動き順ふのである。隨風は風が相繼ぎて至るのを云ふ。この坤と巽と二字を合して「おろし」(高處より吹き下す風。風とも書く。)と訓じたわけである。

八卦は方位を表はすこともあり、乾(北西)坤(南西)艮(北東)巽(南東)をいふ。『周易』は八卦を基本として成る

六十四卦を以て構成し、これを以て宇宙の間に成起する變化消長等の諸現象や、人間社會の盛衰興亡、利害得失を審かにし、處世應變のことを解説しようとするものであるから、八卦の八文字を書くだけでも柱かけとして十分意味深長である。これを以て讀みかへて、その意を取つて見事句となしたところは、俳諧の手腕の非凡なものを窺ひ知られると共に、この一句を以てしても易に對するただならぬ造詣のほどを思はしめるものがある。子規は「獺祭書屋俳話」に其角を論じて、

其角は豪放にしてしかも奇才あり。奇才ありてしかも學識あり。されば時として豪放の眞面目を現はし、時として奇才を弄し學識を現はすなど、機に應じ變に適して、盤根錯節を斷ずること大根午旁を切るが如くなれば、芭蕉も之を賞し、同門も之に服し、終に兒童走卒をして其角の名を知らしむるに至りたり。其角はそれ一世の英傑なるかな。

と評してゐる。それはこの一句についても十分妥當するところがあると思ふ。

蕪村は其角の句を評して、「其角が句集は聞えがたき句多けれども、讀むたびあかず覺ゆ。」(新花摘)と云つてゐる通り、難解の句がかなり見受けられる。特に前書きの中に意味の明かにし難いものがある。二三次に指摘すると、

情春

梅ちるや是を箕にせん鳳巾

情春の意は詳かでない。『五元集拾遺』に「惜春」とある。これであれば意味が通じ、句との關聯が明かである。

陽句

蝶とぶや猿を呼び込む原屋敷

陽句の語も意味不詳。或は陽春ではあるまいか。春は異體字に句に似たものがあるので、これを誤つたものではあるまいか。

其角はなかなかの能書家で、篆隸に工であつたので、讀む者が誤つたのではあるまいか。

狂倡途

かげらふや小磯の砂も吹たてず

狂倡の意不詳。倡狂であれば意味が通じる。倡狂は猖狂にも作る。『莊子』の「山木篇」に、不知義之所適、不知禮之所將。猖狂妄行。乃蹈大方。と見える。猖狂は恣横の制すべからざる意。猖狂妄行とは、欲するままに行つて、しかも大道に合ふことである。猖狂或は倡狂であれば意味が通じる。別に「長途狂倡の吟」と前書きのあるものに次の二句がある。

あら井にてめしくふやふに師走哉

紙子きて渡る瀬も有大井川

詩經に夏は散居と侍る。深川の旧庵より川づらを見れば、舟にてふさぎ申候

極あはひに猫よく寝たり下涼

前書きに「詩經に夏は散居と侍る」とあるが、『詩經』にこの語が見當らない。「歸居」ではあるまいか。「唐風」の「葛生」

似てゐるやうに思ふ。其角の漢詩文の背景を調査するに當つて、蛻巖との交友關係を知る必要があるのではないかと思つてゐる。

格枝亭柱かくしに

乾や兌坎震離ス艮坤巽

右の句について、「空や秋水ゆりはなす山おろし」と御よみ候へとある。これは易の八卦を句にしたものである。八卦とは乾三兌三離三震三巽三坎三艮三坤三をいふ。これを大體順序に従つて配列し、一句を作つて柱かくしとしたものである。これを以て句としての價値を論ずることは困難であるかも知れないが、單なる判じ物的興味や駄洒落とだけでは片づけられない、其角の學問の素養が流露してゐるやうに思はれる。彼の趣向の斬新と著想の奇抜、豊富な學識には驚くばかりである。この句は誰にも簡單に求め得べきものではあるまい。この句は易の知識のみで詠み去つてゐるのではなく、一般の訓に從つたところもある。目的は柱かくしのために八卦の語を用ひて句を作つたといふだけのことであるから、鑑賞の態度も自ら異にすべきものであらう。私はこの句において其角の其角たる所以を思ふのである。

「乾」は天である。天と空とは神と偶像のやうな關係で、同じものではないが、「そら」と讀んだのは、俗に天と空を同一視する考へに依つたものである。「程傳」に、乾、天也。乾者天之形體。とある。「兌」を秋と訓じたのは、「説卦傳」に、兌、正秋也。萬物之所説也。とあるからである。兌は秋で、方位では西に當る。「坎」は水である。象に、水流而不可盈。行險而不失其信。また象に、水

洊至習坎。君子以常德行。習教事。とある。水流れて盈たずとは、水源から流れ出る水も地中に潤下して、なかなか科に満たない意。水洊りに至るとは、水が連續して來る意。即ち坎を水と訓ずることは字義に叶つてゐる。「震」は震動雷鳴の意。震亨。震來虩虩。笑言啞啞。震驚百里。不喪七鬯。とあり、象に、洊雷震。君子以恐懼脩省。とある。其角が「ゆり」(搖)と訓じたのは、震動の字義によつたものである。「離」は『周易』では附麗親附の意。「麗は附着」「つくる」意。象曰。離麗也。日月麗乎天。百穀艸木麗乎地。とある。一般にはこの反對の離別分散、はなす、はなれる意として用ひられる。ここは易における字義でなくて後者の意である。「艮」をやま(山)と訓じた。象に、艮止也。時止則止。時行則行。動靜不失其時。其道光明。艮其止。止其所止也。とある。艮は止まる意である。これを山と云ふのは、象に、兼山艮。君子以思不出其位。とあるによつたものである。これは山の止まり靜かなるに取つたもの。兼山とは重なつた山で、上下の卦が共に艮であるから云つたものである。「坤」は乾に對する卦。その重剛に對して柔順の意である。象曰。至哉坤元。萬物資生。乃順承天。坤厚載物。德合無疆。含弘光大。品物咸亨。牝馬地類。行地無疆。柔順利貞。君子收行。先迷後順。得常。とある。この柔順にして物に降る意と、巽の意を合して「おろし」と讀んだのである。「巽」は「したがつぶ」と讀む。象曰。重巽以申命。剛巽乎中正而志行。柔皆順乎剛。とあり。象には、隨風巽。とある。風が

能ハズ。而シテ之ニ主タル者ハ造物ナリ。則チ造物ヲ眞君ト爲ス。故ニ曰ク、其ノ眞君有リテ存スト。」といふ。即ち百骸九竅六藏は心の臣であつて、心はこれらの君といふことになる。

しかし心も眞君ではなくて、眞の君は宇宙の主宰者である造物といふことになる。この「齊物論」の六藏を取つて庵號としたと思はれるのであるが、右の意の外に別に意味があつたのではあるまいか。即ち六藏の眞君たる造物である。同じく『莊子』の「大宗師篇」に、偉哉。夫造物者。將以予爲此拘拘也。曲倭發背。上有五管。頤隱於齊。肩高於頂。句贅指天。陰陽之氣有沴。其心間而無事。云々とある。彼の造物者は誠に偉大なものである。私を縮んで伸びないやうにした。曲倭が背に出來て、上に五臓があがり、頤は齊を隠し、肩は頭より高く、頸椎は天を指すやうにそばだつてゐる。これは陰陽の氣が亂れてゐるのである。しかるに心は閑逸無事で、造物がわが形態を變化させることがあつても、これに順つて思ふところがないのである。得失生死などはみな自然である。人はただこの自然に順ふだけであると説いてゐる。「天下篇」には、上與造化遊。下與外死生無終始者上爲友。といふ。上は造物者と遊び、下は死生を外にして、終始なき永遠の存在を友とするのである。六藏庵の號は右に述べた『莊子』の、造物の爲すところに順ひ自然を友とする意を寓したものでないかと思考するのである。

以上其角の俳號について出典由來を考察し來つたのであるが、『周易』『論語』『老子』『莊子』『圓機活法』『錦繡段』『蒙求』等の諸書から取られてゐるやうに思はれるのである。

さて晋其角が『周易』に出典があることは既に指摘せられて

ゐるところであるが、其角の『周易』についての造詣のほどを知るために、彼の作の一句を取つてその背景を考察してみようと思ふ。

其角の非凡の天分は、漢學についても相當の域に達してゐたことは、芭蕉の門人の中でも一二を屈する人であつたことは明かである。しかしその實力の程は證すべき著書が存しないのである。僅かにその俳諧や文章を以て想像するのみである。例へば素堂について見れば五十數首の漢詩が現存する。許六には『絶句和訓三體詩』の著があつて、『三體詩』の絶句百七十四首の一一についてその詩意を記してゐる。其角にこれがないのである。それで左に掲げる句を以て其角の『周易』の素養を見ることがしよう。彼は儒學を服部寛齊に、易と詩を大嶺和尚に學んだことは前に述べた。しかしまた別に柳浪舎龜毛といふ友人があつた。龜毛は梁田蛻巖の俳號である。蛻巖は總州の人（武藏の人とも云ふ）赤石侯に仕へた。識見高遠、才藻絶倫、詩豪を以て一世に鳴つた人物であつた。江村北海は『日本詩史』に、「天才巧妙、前二古人無ク、後二繼グ者無シ。……今、其ノ集（蛻巖集）ヲ讀ムニ、譬ヘバ猶ホ崑崙ノ邱ニ上レバ歩歩是レ玉、梅壇ノ林ニ入レバ枝枝是レ香ナルガゴトシ。詩モ此ニ至レバ宜シク異論ナカルベシ。而ルニ猶ホ未ダ善ク盡サザルアルハ何ゾヤ。蛻巖ノ才ヲ用フルコト太ダ過グルノミ、張茂先、陸士衡ニ謂ツテ曰ク、人ハ常ニ才ノ少キヲ恨ム。而ルニ子ハ更ニ其ノ多キヲ患フト。余、蛻翁ニ於テ復タ云フ。」と論じてゐる。私はこの人との交際もただならぬものがあつたと思ふ。

「龜毛に餞」の前書きのある一句があり、龜毛も其角の『三上吟』の跋を書いてゐる。其角と龜毛との關係は、芭蕉と素堂に

か。『論語』の「微子」に、楚狂接輿。歌而過孔子。曰。鳳兮鳳兮。何徳之衰。往者不可諫。來者猶可追。已而已而。今之從政者殆而。と見える。接輿は楚人。狂人のふりをして世を避けた隱者で、世間の人は狂接輿と呼んだ。『莊子』の「人間世」に、孔子適楚。楚狂接輿。游其門。曰。鳳兮鳳兮。何如徳之衰也。來世不可待。往世不可追也。天下有道。聖人成焉。天下無道。聖人生焉。方今之時。僅免刑焉。云々ともある。狂而の而の文字は意味深長で含蓄に富む。恐らくは右の狂接輿の意を偶したであらう。狂接輿が、孔子に政事に關與することなく、退いて身の安泰を求めたがよるしからうと、鳳兮鳳兮と歌つたのである。其角が世間から輻晦して生活する意を寓したものと考へて差支へあるまい。

▼善哉堂——『蒙求』の「伯牙絶絃」に『列子』を引いて云ふ、伯牙善鼓琴。鍾子期善聽。伯牙鼓琴。志在高山。子期曰。善哉。峩峩乎若泰山。志在流水。子期曰。善哉。洋洋兮若江河。伯牙所念。子期得之。とある。其角の常に志を得て自ら善哉と云つたのであらうか。或は鳳凰の夜鳴く聲を善哉といふ。さうだとすれば、一は騷角を聯想し、一は狂接輿の、鳳兮鳳兮の歌と呼應するであらう。『初學記』鳥部「鳳」に、行鳴曰歸。嬉。止鳴曰提扶。夜鳴曰善哉。晨鳴曰賀世。飛鳴曰即都。と見える。彼はしばしば酒樓に登つて放蕩を縦にしたが、鳳凰夜鳴の意に想ひを馳せたかも知れない。

▼涉川——『老子』に、古之善爲士者。微妙玄通。深不可識。夫惟不可識。故強爲之容。豫兮

若冬涉川。猶若畏四鄰。儼兮其若客。渙兮若冰之將釋。敦兮其若樸。曠兮其若谷。深兮其若濁。と見える。この意は古の虛無自然の道を得た善士の才徳の、玄妙で測り識ることの出来ない様を形容したものである。豫兮若冬涉川とは、冬に川を徒渉するやうに、寒さのために逡巡して進みかねるのに似てゐる。強進することを止めて、躊躇するやうな態度がよろしいことを述べたものである。これを併號としたのは、『周易』の晋其角の語を取つたと、意識において相通するものがあるやうに思はれる。其角が自ら強引奔放な性格を矯正しようとした志を見るのである。

▼六藏庵——（ロクザウでなくてリクザウと訓ずるものと思はれる）『莊子』の「齊物論」に、百骸。九竅。六藏。骸而存焉。吾誰與爲親。汝皆説之乎。其有私焉。如是。皆有爲臣妾乎。其臣妾不足以相治乎。其遞相爲君臣乎。其有眞君存焉。如求得其情。與不得。無益乎。其眞。とある。骸は骨。人には三百六十の骨節があると云はれるから百骸といふ。九竅は耳目鼻口等九つの竅。六藏は六臟。肺心肝脾胃腎の六つの内臟。骸は備はる意。人間の身體にはこれらのものが悉く備はつて存在してゐる。この文章には異説があるが、當時最も布及した注釋書は、林希逸の『莊子膚齋口義』であつたから、これによつて見ると、「手足耳目鼻舌、互ニ用ヲ相爲スナリ。役ヲ受クル者ヲ臣ト爲シ、之ヲ役スル者ヲ君ト爲ス。是レ時トシテ手ヲ用ヒ、手、時トシテ足ヲ用フ。故ニ曰ハク、遞ニ君臣ト相爲ルト、百骸。九竅。六藏ノ君臣、既ニ得テ名ヲ定ムベカラズ。則チ心ハ身ノ主ナリ。其ノ心ヲ以テ君ト爲サンカ。心又以テ自ら主タル

やうに思はれる。「圓機活法」走獸門、「麒麟」の叙事・格物論に、麒麟。麕、身馬、足牛、尾。黄色圓蹄有角。有肉高一丈二尺。含仁抱義。行步中規。折旋中矩。音中鐘呂。……牝曰麟。とある。麒麟は聖人が世に出ると現はれるという神獸である。鳥における鳳凰と對するものである。ここで芭蕉の別號が鳳尾であつたことと思ひ合せ、鳳尾・麒麟と對するわけで、偶然ではないやうに思はれる。この號でも二人の性格が現はれてゐるやうで面白い。雅號は自ら稱するものであるから、宜なるかなと首肯せられるのである。芭蕉も「花やかなること其角に及ばず」と述べ、その門人たちも推重し、論者は常に門人の筆頭に擧げてゐる。加之、明和五年の『柳多留』にさへも

雨蛙すぐに其角がわきをつけ
とあるやうに、一般に其角の芭蕉門下における評價は決定してゐたのであるから、其角の自負も當然と思はれるのである。

▼螺舍・螺子——螺は、にな・にし・かたつむりなど、所謂螺旋状をした貝を云ひ、さざえ(榮螺)は殻に角を有してゐる。これは前に記した麒麟の角の、折旋中矩の聯想によつたものであらう。また「ほらがひ」をいふ。俗に大言壯語を好む者を法螺吹きといふが、これを兼ねた意とも取れる。これもまた其角の性格の一端を表現した語ではあるまいか。

鐵槌にわれから羸螺のからみ哉

世の中の榮螺も鼻をあけの春

枇杷の葉やとれば角なき蝸牛

寶引に蝸牛の角をたゞく也

蝸牛豆かとばかり柳かな

文七にふまるな庭のかたつぶり
鎌倉やむかしの角の蝸牛

景政が片目をひろふ田螺かな

これらの句はこの螺舍・螺子の號と何か關係があるやうにも思はれる。或は自ら其角の關心をそつたものではなからうか。

▼雷柱子——『錦繡段』韓致元の「雷」に、閑人倚柱笑雷公。又向深山聳怪松。必若有蘇三天下意。何如驚起武侯龍。『聯珠詩格』・(『圓機活法』天文門・雷の「起龍」にも見える)とある、閑人柱ニ倚ツテ雷公ヲ笑フの句に取つたものではあるまいか。雷公とは雷。『世説』雅量に、夏侯太初。嘗倚柱作書。時大雨霹靂。破所倚柱。衣服焦然。神色無變。書亦如故。と見える。閑人とは夏侯玄(夏侯が姓、名は玄、字は太初)と云ふ。夏侯玄が物靜かに柱に依つて書物を見てゐる時、雷が柱に落ちたが、夏侯玄は少しも驚かず笑つてゐたといふ。夏侯玄は三國魏の人。官は大鴻臚に至つた。司馬懿を謀つて族滅せられた。刑に臨んで顔色變らず、舉動自若であつたといふ。閑人とは其角自らを云つたものと考へられ、豪膽自若の意に取つたのであらう。如何にも超然たる其角の風采を想起させるものがある。

▼狂雷堂——雷柱子と何れが前か審にしないが、何れかの聯想によつたものであらう。狂雷の語は蘇東坡の、次韻高要令劉湜峽山寺見寄の、狂雷失語。過電不容目。とあるのによつたものか。語語は互にうちとけて語ることである。言外に雷公を笑ふ意を含んでゐるやうでもある。

▼狂而堂——前の狂雷堂と狂の文字において關聯があつてのことかも知れないが、意味の上からは、狂而非狂ではなからう

揚屋に醉房して

惡の年差紙籠をさらへけり

大酒に起てものうき裕かな

草の戸に我は夢くふはたる哉

酒ゆへと病を悟る師走かな

曉の反吐は隣家かほととぎす

これらの句を見ても知られるやうに、相當な放蕩生活を行つてゐたことは、既に先人の説くところである。早くから學問に志した彼であつてみれば、傲岸奔放、常に過度にわたる弊を抱いてゐたことは知悉してゐたであらう。彼は彼なりにこの性を矯めようと思つたに相違ないのである。斯くして『易經』の、晋其角の語を取り、克己自制の念を喚起しようとしたものと思ふ。これは後に解説する「涉川」の號と併せ考へても首肯せられるところである。

▼晋子——右の晋其角の晋を取つたことに異論はないと思はれるが、晋其角の晋は、物徂徠の物、謝蕪村の謝の如く中國風に一字の姓に見立てたものと思はれる。その晋を取つて男子の通稱たる子を附して號としたものであらう。しかしこれには若干の疑問もなしとしない。例へば蘇東坡自ら蘇子^{姓五}と呼び、歐陽修は歐陽子と稱してゐるのであるが、これはあくまで姓の自稱^{姓六}であつて雅號として用ひてゐるのではあるまい。其角もこの方法によつて晋子と稱したとすれば、晋其角の姓であつて、直ちに號と考へるには問題もあらうかと思はれるのである。

▼寶晋齋——『五元集』の自序に、

寶晋齋は米元章が硯の裏に鐫入たる號なり。三弄子其の硯を予にあたへて、寶井晋子といへば此號宜しくかなへりとし

て、筆事ことに述べ給へるを、やがて佐玄龍が額を需て、雪月の軒端にかけたなり。

とあることによつてその由來は明かである。即ち米元章の書齋の名である寶晋齋を借りて號としたものである。三弄が所持したのであるが、これはたまたま寶井其角の姓の寶と晋其角の晋の字のあることによつて、宜しく叶つたわけである。其角は得難き寶硯を得たと共に風雅な書齋名を得たのである。

米元章が寶晋を以て書齋の名號としたことについては、彼が晋人の法書碑を幽壁の間に刻せしめたことに因んだものといふ。その著に『寶晋山林集拾遺』八卷、『寶晋長短句』一卷、『寶晋英光集』八卷（又は六卷）があり、また曹之格は『寶晋齋法帖』十卷を模刻し、宋の岳珂は『寶晋齋法書贊』二十八卷を著してゐる。

米元章は名を芾^{フツ}、號を南宮・海嶽外史・廉門居士と云つた。元章はその字である。前述の如く書齋名を寶晋、堂名を英光と呼んだ。宋の襄陽の人。（或は吳人ともいふ。）特に書に工で、山水人物畫に長じた。また書畫骨董を愛好した。それに關する著に『米芾書畫史』がある。『寶晋英光集』はその詩文集である。大觀元年（一一〇七）年五十七で卒した。岳珂の『寶晋英光集』序に、「芾ノ詩文、語ニ踏襲ナク、風煙ノ上ニ出ヅ。其ノ詞翰同ジク凌雲ノ氣有ルヲ覺ユ。」と評してゐる。思ふに其角の句にはこの米芾の評がそのまま妥當するものがあるやうに思はれる。

▼麒麟——麒と其の音が通ふために附けられたものであらう。しかし麒麟の意義内容から考へるときは別に微意が存した

寶井其角と漢文學

仁 枝 忠

(昭和五十四年四月十六日)

其角は寛文元年(一六六一)七月十七日、醫師竹下東順を父として生れた。始め榎本と稱したが、これは母方の姓である。

後に寶井と稱した。名を侃憲と云ひ、其角と號した。また俳姓を晋と稱した。これは中國風の姓として用ひたのであらう。別號として螺舎・螺子・狂雷堂・雷柱子・狂而堂・善哉庵・六藏庵・晋子・騏角・涉川・寶晋齋などがある。

略譜によれば十歳で大圓寺へ入學し、十四歳で『本草綱目』を寫し、十五歳で『易經』の素本を寫したとあるので、早くから漢學の志があり俊材の素質を發揮したやうである。儒學を服部寛齋注一に學び、詩と易を大嶺和尚注二に、書道は佐々木玄龍注三に、畫を英一蝶注四に學んだといふ。寶永四年(一七〇七)二月三十日歿した。年四十七。小論の目的である其角の漢學の素養については、以下彼の發句の漢文學の背景について見たいのであるが、芭蕉門下の俊秀の多い中でも、俳諧はもとより漢學においても傑出した人物であつたことは疑ふ餘地はないと思ふ。

其角が如何に漢文學を受容攝取したかを知るために、先づその俳號の出典や由來について考察したいと思ふ。私は前に芭蕉・素堂・蕪村・召波等について俳號の出典を調査したのであるが、その人物の理想・教養・考へ方など、必ずしも表面に現

はれないものが表出してゐたり、愛讀書のリストが知られたりして、なかなか興味深いものがあるのである。

▼晋其角——『周易』晋の卦に、上九。晋其角。維用伐邑。厲吉。无咎。貞吝。象曰。維用伐邑。道未光也。とある。この晋其角に依つたことは既に云はれてゐるところである。十五歳で『易經』の素本を寫したといふのであるから、易に對して早くから興味を示されてゐたのである。この意を少しく考へてみよう。

角は云ふまでもなく動物の頭上にあつて強剛なるものである。その晋すすむといふのは剛の極限に處る、即ち中庸を失つて剛強に過ぎることである。さてこの其の角を晋むといふ剛強の徳も、これを諸侯についてみるときは、自分の領邑内の叛亂を爲す者を征伐するときには、危難なことではあるが、吉であつて咎とはならないのである。(これはしかし諸侯の領邑内のことであつて、これを領外に及ぼして天下を平定しようなどといふことに使ふのであれば咎となるわけである。)これを外に行はするのには咎であるが、これを己に對して用ひるときには吉といふのであるから、自らの徳を涵養するについては、意志の剛強を以て己に對處することになるのであるから、甚だ結構なことに云はなければならぬであらう。

さて其角は何故にこの三字を選んで俳姓と俳號にしたのであらうか。思ふに彼の性格は逸居奔放で物に拘泥せず、活達自在の才氣に溺れて、しばしば中庸を失ふことがあつたやうである。或る時には青樓に登つて大盃滿引をほしきままにし、或る時には遊里に流連して放逸を極めるなど、芭蕉も彼を戒めて、薜に我は飯喰ふ男哉 と云つたほどである。